成寿

SEIJU
2007年
第38巻
冬季

一周忌から一年を経た平成十八年十二月十二日、当山釈迦殿では大圓大和尚の三回忌がつつがなく執り行われました。当日は、大和尚に縁のあるご尊宿のご寺院様、教区のご寺院様をはじめ、総代・役員のみなさまが善光寺を訪れ、亡き大圓大和尚の冥福を祈り、また、在りし日の思い出に浸りました。「善光寺が滞りなく本日を迎えることができたことは、師匠の余徳と非常に感謝しております。さらにこの一年間、多くの方々にご指導をいただき、改めて人と人との繋がりの大切さを感じた一年だったと思います」と、博志住職の挨拶ではご臨席の方々に心から感謝を伝えていました。

導師本寺光真寺黒田俊雄老師

壁画に描かれた大圓大和尚と博志住職

多くのご寺院様の読経に
包まれた厳粛な空気の中で

導師様にお礼のお拝をする博志住職

ご寺院様によるご焼香

大圓大和尚に縁の深いみなさまにお集まりいただいて

大乗寺山主
東隆眞老師

黒田さんと回ったアメリカのことを思い出しました。これから三十年も経てば仏教や禅の中心はアメリカやヨーロッパに移るのではないかと予感しています。それを広げてきた大きな力は前角老師と黒田老師です。我々も新しい時代に向けてどういうふうにしなければならないか、いまさらのごとく感じています。

駒澤大学理事
宮本延雄様

『成寿』を読み直すと、大圓大和尚はなかなか普通ではできない、勇気と素晴らしい決断力を持ち、そして行動に移した人、というのが実感です。そして、その背景に和合の心、慈悲の心がみなぎっているからこそ、みんながそれを信じ、それに従っていくのです。檀信徒の方々はこの魅力についていくのだとつくづく思いました。

埼玉・能仁寺住職
萩野映明老師

思い出といえば、それがあり過ぎるほど、大圓和尚とはいろいろなご縁がありました。ここにおられる東老師とお親しくなれたのも大圓和尚の影響です。そう考えると寂しいですよ。私の寺にもこれと同じ大圓和尚の写真を飾っています。いつもその活力、パワーを感じています。

正翁寺住職
篁素明老師

育英会のことなどで、なかなか大圓和尚の志が理解されず、そうしたときに彼の愚痴を聞いたり、「どうしたらいい？」と聞かれて、その度にいろいろと答えていました。いろいろなエピソードが浮かんできます。

そんな大圓和尚がこのお寺を、あるいはみなさまをこれからもお守りいただけるように、祈念しております。

故人を偲びながらの設齋

謹啓

春暖の候、御一統様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、今回善光寺季刊誌「成寿」第四十一号をお届けいたします。

この号は特に晋山結制並びに大圓武志大和尚七回忌のご報告と、横浜善光寺留学僧育英会辞令交付式を特集致しました。

ご高覧頂ければ幸いでございます。

皆々様のご健勝をお祈り申し上げますと共に今後とも尚一層の御法愛、御教導賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

謹白

平成二十三年三月吉日

横浜善光寺　住職　黒田博志　合掌

カラー■當山二世中興大圓武志大和尚三回忌……1
特集●育英会再開に向けて―博志住職タイへ……13
●北陸参拝旅行　大乗寺・永光寺を訪ねて……19
連載●『普勧坐禅儀』に学ぶ　その二……安藤嘉則　31
カラー■ほほえみ子安観音開眼式……39
読物●ほほえみ子安観音さま……東郷　敏　43
●春彼岸法要法話　彼岸と供養……佐々木宏幹　51
●秋彼岸法要法話　まごころに生きる……関水俊道　76
●人同じからず　―「生きる力」より転載……黒田博志　92
●参禅会・写経会のお知らせ……94
●善光寺霊園ニュース……98
●ニュース・アラカルト……105
留学僧募集のお知らせ　102
読者のたより　113
編集後記　120

題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職　黒田博志

「三年父の道、改むるなきは孝というべし」

この言葉を胸に日々歩んでおりますが、歩めば歩むほどに師父の道は高く、険しいものと実感しております。

師父大圓和尚が遷化してより暦の上では三年が経とうとしております。昨年末無事に三回忌も相済ませ、この間山内行事等も、師父存命中といささかも変わることなくいまを迎え過ごしております。これもひとえに、檀信徒の皆様方、関係のご寺院様方、関係各位様のおかげでございます。心より深く深く感謝申し上げ

ます。

「宗祖を通して釈尊に還る」という師父の理念に鑑み、昨年、単身で永平寺と共に曹洞禅の源流をなす石川県の古刹、大乗寺・永光寺を訪ねました。本年はまた六十余名の檀信徒の方々と共に拝登し、改めて曹洞宗の法脈とその尊崇、さらには歴史の重さを再認識することができました。

また師父の遺志、「善光寺留学育英会」もこの三年間止む無く休会しておりましたが、来春より再開させて頂く運びとなりました。振り返りますと、病床にあった父が私の目をしっかりと見つめて「いいか、博志。育英会は善光寺の支柱である。お前の代になっても育英会は続けて欲しい。たとえ、一人でもいいから続けてくれ。頼むな。」と言われた事が、この三年間頭から離れることはありませんでした。以来、寺の行事、檀務の繁忙の中時間をつくり、関係各位様の協力を頂いて主となる派遣先アメリカ・タイ・ドイツ等に足を運び、師父の理念そして、実践してきた事を目のあたりに致しました。その中で多くのご縁の方々に背中を押

され、また、総代会の賛同もいただきました。ここに育英会を継承し、更に発展させていけるように精一杯、弁道精進致す決意でございます。今後ともご指導宜しくお願い申し上げます。

さらに山内では、五月に境内中庭の地蔵菩薩さま群像の中央に「ほほえみ子安観音菩薩」さまをお迎えすることができました。

なにもかも大圓武志大和尚の余徳と感じ入っております。

迎える年は四年目。自身の正念場と位置づけ勇往邁進の決意です。

「来者如帰（来る者帰るが如し）」願わくば善光寺はそんな寺でありたいと祈念しています。檀信徒の皆様方、関係ご寺院様方、関係各位様、益々お健やかで安らぎのある日々を心よりお祈り申し上げております。

育英会再開に向けて

博志住職　タイへ

大圓大和尚の遷化とともに活動を停止していた善光寺留学僧育英会ですが、これまで大きなエネルギーを注ぎ込まれてきた師父の遺志を絶ってはならないとの博志住職の考えから、来年から留学僧の募集を再開することになりました。そして、その志を伝えに博志住職ら一行四人は、育英会にゆかりの深いタイ・バンコクのワット・パクナムを訪れ、住職ロンボー・ソムデット師に留学僧受け入れのお願いをいたしました。

ワット・パクナム訪問の記

善光寺留学育英会参与（第14回育英生）　真野大成師

今年の四月二十四日、博志方丈、成願寺の山口老師、総代の東郷氏そして筆者の四人は、タイのバンコクにあるワット・パクナム（パクナム寺）にご住職のロンポー・ソムデットを表敬訪問しました。ワット・パクナムは、善光寺先住の大圓大和尚が若い頃一年ほど安居・修行をし、その後、育英会を始められてからは、その主要な派遣先の一つとして長いお付き合いのあるタイ上座部仏教のお寺です。大圓大和尚も、お元気な頃は毎年のようにバンコクを訪れ、旧知の僧侶方との親交を温めてこられました。そこで、大圓大和尚の三回忌が過ぎたのを期に、博志方丈の新住職就任のご挨拶と、あわせて育英会留学僧の受け入れ継続のお願いのために伺ったものです。

当日、ご住職はお忙しいお体にもかかわらず、私たちをお寺で迎えてくださいました。ところで、ロンポー・ソムデットというのは老師猊下という意味の呼び名で、タイの王室からソムデットの敬称を持つ尊称を贈られたことから、そう呼ばれるようになったものです。ご住職は、タイ僧伽の最高意志決定機関である長老会議のメ

ンバーでもあり、八十歳を超えるご高齢ながら、日ごろほとんど休むまもなく各地を飛び回り、僧伽を指導しておられます。

お寺に伺ったとき、ご住職はちょうど法堂で、布薩日のお籠もりのために集まった信者に、お説法をしておられるところでした。程なくして座所に戻ってこられたご住職は、博志方丈を見るなり、

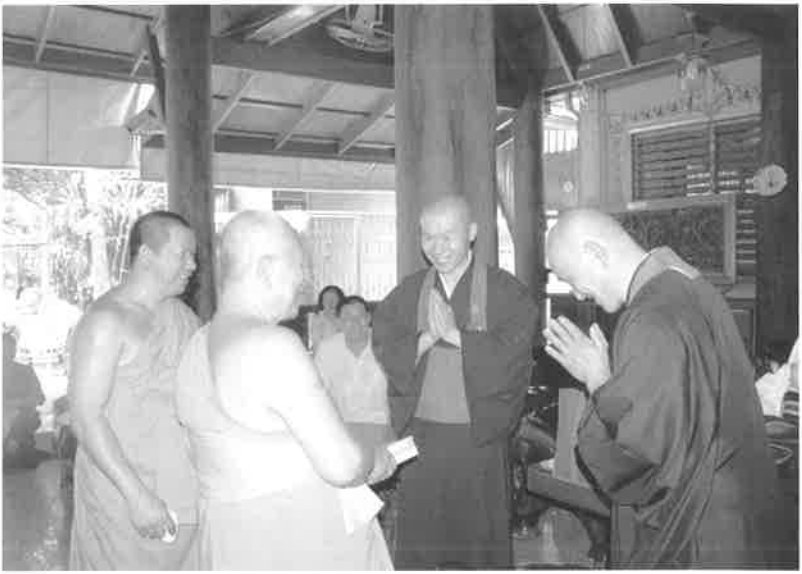
「ヒロシか」

と、声をかけられ、席に着くとご挨拶もそこそこに昔の思い出を話し出されました。博志方丈は子供の頃、ご住職から、ご兄弟と一緒に沙弥得度を受けています。また、平成十二年にはワット・パクナムで半年ほど安居・修行もしています。ご住職は、それらのことを懐かしそうに話されました。ソムデットは、大圓大和尚が亡くなられてから、博志方丈が再びワット・パクナムを訪ねてくるのを待っておられたようでした。

訪問の主たる目的である留学僧の受け入れのお願いも、喜んで受け入れて貰えました。ご住職は、

「お父上の頃と同じようにやってください。留学僧はいつでも歓迎しますよ」

と、言ってくださいました。実は、筆者は以前ワット・パクナムに四年ほど安居をしていました。そこで、お話をいただいた時、今回の筆者の役割は一行の通訳にあることを察し、ひそか



にお願いの口上をタイ語で用意して行ったのです。しかし、その心もとない話しぶりに痺れを切らしたこともあるのでしょう、口上を全部聞くまでもなく、ご住職は用の向きを察し、ご自分から声をかけて下さいました。

筆者が最後にワット・パクナムを訪れたのは、ちょうど三年前、二〇〇四年（平成十六年）四月に大圓大和尚と病気のご住職をお見舞いしたときでした。工事中だった僧坊の建物は完成し、空き地だったところには国王の長寿を祝う大きな仏塔が着工されるなど、お寺の外観は少しずつ変わって行っていましたが、私たちを迎えてくれる旧知のお坊さんたちの笑顔は昔のままでした。ワット・パクナムと日本の仏教界の間には約五十年を超える長い交流の歴史があります。お寺の副住職のアーチャン・カワキタという日系人のお坊さんがおられたことが、そのきっかけではないかと思います。当初、大圓大和尚が

安居・修行をされた頃は曹洞宗大本山総持寺が窓口になって、留学僧の派遣を行っていたようです。そして、昭和五十九年の設立を機にその事業を引き継いだのが善光寺の留学僧育英会でした。上座部仏教で得度を受けるには、得度を授けるお坊さんの檀越（信者）の仲介がなければなりません。タイでは一般の人々が、普通にやっていることですが、日本でその役を果たせるのは善光寺の留学僧育英会を中心とした、かつての留学僧のグループだけだろうと思います。上座部仏教の勉強を志す後進のためにも、この交流関係は是非、大事に守っていっていただきたいし、筆者自身も及ばずながらそのために力を尽くして生きたいと思っています。

「このところ日本人のお坊さんが来ていないね」

帰り際に、旧知のお坊さんの一人が残念そうに言っていました。善光寺の留学僧育英会もそ

うですが、他の窓口でも上座部仏教の得度・修行を志す人の数は少なくなっているようです。かつて、大圓大和尚が安居・修行をされた頃は、毎年二人、三人といった規模で留学僧を送り出していました。今回の訪問でご一緒した山口老師も、よく、

「私たちの時代は、上座部の黄衣を着ることが憧れでしたよ」

と、話してくださいます。時代が変わったということでしょうか。今日、世間の通念では仏教は宗教の一つであると考えられています。しかし、修行を旨とするお釈迦さまの教えは、神をたて信ずることを中心にすえる宗教とは本来、カテゴリーを同じくするものではないはずです。そして、そのお釈迦さまの元々の教えが、どのようなものであるのかということを知るためには、お釈迦さまの教えを最も正確に伝えるといわれる上座部仏教の勉強が、是非必要であると筆者は思います。上座部仏教を学ぶ人々が増え、お釈迦さまの教えがさらによく私たちを導いてくれる日が来ることを願って、私たちはお寺を後にしました。

■特集

北陸参拝旅行

大乗寺・永光寺を訪ねて

昨年六月、博志住職が師父の足跡をたどるために訪れた北陸路に、今年五月善光寺旅行会・婦人会の一行六十二名が訪れました。曹洞宗の歴史の深淵に触れようとする人、亡くなった母君の遺影と共に心の寂寞を癒そうと参加した人、自らの修行の地に赴き、その気持ちを確かなものにしようとする人…。歴史のなかに息づいていた二つの名刹はそれぞれの人々の思いを温かく迎えいれていました。

北陸の古刹、大乗寺と永光寺参拝の旅

善光寺旅行会団長　熊谷豊太郎

平成十九年五月九日と十日の二日間に亘り、善光寺旅行会及び婦人会の主催で行われました。女性は伊籐婦人会会長、中村副会長並びに黒田倫子先代住職夫人以下三十三名、男性は黒田博志住職以下二十九名、合計六十二名の内訳で、寺院参拝の人数としては、多い団体との話も訪問先でいただきました。

幸い天候に恵まれ、羽田空港より小松空港に飛び、バス二台に分乗して金沢市の兼六園を観光、昼食後、曹洞宗大本山永平寺に次ぐ古刹で、宏大な地域に古木と新緑に包まれて建つ、曹洞宗第三代徹通義介禅師が開山創建された、東秀山大乗寺を訪れました。

歴史を刻む蒼色重厚な山内に迎えられ、入口の左右には二対の「阿、吽」の仁王像が安置され、山門をくぐると正面に在る仏殿をはじめ、七堂伽藍をそなえる壮大な寺院であります。ご本尊釈迦牟尼仏を奉安している荘厳に満ちた仏殿、私達は粛々と静寂のこもる広々とした法堂に通され、黒田住職が導師を勤める法要に安息合掌して、しばし心の洗われる思いでした。

当寺山主東隆眞住職さまには、一同の訪問を大層喜んでいただき、温かい歓迎のご挨拶を頂戴し、黒田住職、倫子先代夫人等と懇談、更に寺内案内等懇切な気配りを賜り、厚く感謝を申し上げて当寺を辞しました。

東住職さまは、先代大圓武志大和尚さまとは大学も同期で、日頃より親交を重ねていた格別の仲、駒沢女子大学学長より大乗寺の住職として入山された際も大変喜んでおり、先代が遷化された際も、最先に駆けつけていただいた親友

です。

私達は名刹大乗寺に参拝した感激と満足感のうちに、当日の宿泊地和倉温泉に到着、一同は名湯につかり、早朝からの疲れを癒やし、夕食を囲みながら、お互いの懇親を深めて、第一日目を終りました。

翌日、一同清々しい気持で、能登羽咋市に在る、洞谷山永光寺を訪ねました。

永光寺は曹洞宗第四代の瑩山禅師の開山により創建されました。瑩山禅師は大乗寺の二代目の住職を務めた後に、永光寺の初代住職として、立派に開建を果たされ、その後鶴見の大本山總持寺を開山創建されて布教に尽力、永平寺と並ぶ大本山として権威ある寺門に位置づけました。しかし晩年は永光寺に戻り、この寺院にて遷化されたとのことでした。

永光寺の創建当時は緑豊かな洞谷山を背に、五院二十数坊を擁する立派な寺院でありました

が、永い歴史の盛衰を繰り返し現在は再建の途上にあります。現在の白木造りの堂々たる山門、法堂、廻廊、坐禅の僧堂、総てが約七〇〇年の歴史をもつ幽玄な雰囲気を感じさせます。寺院の背後の山上には清浄な霊気に包まれた「五老峯」の墳墓があります。五老峯とは曹洞宗の五祖の各遺品が埋納されているそうです。

一行は幽遠な環境に包まれた古刹を辞し、名陶九谷焼に向かい優美な芸術品を見学、同所にて昼食休憩後、現在米国ヤンキースの松井秀喜選手の野球展示館を見学して、折しも小雨がちらつく小松空港に到着、参加者一同は、無事故と恵まれた天候に、それぞれ充実した感慨を胸に羽田空港へと向かいました。

脈脈とした歴史を歩く

善光寺婦人会副会長　中村　茂子

ゴーン、ゴーン、日が傾く夕暮、どこからともなく、点在するお寺からの鐘の音が響きます。金沢市内からほど近い卯辰山に、両親が住んでおりました。父はその地で亡くなり、分骨させて頂いています。

折りおりに、里に帰ることがありましたが、子育ての真最中で、お寺を参拝して廻ることが余りありませんでした。

善光寺様と深く御縁のおありの東隆眞様が、曹洞宗の最も由緒ある大乗寺の山主様（御住職様）になられ、今度、善光寺様の皆様と御一緒に、参拝させていただく機会をいただきました。

深い木々の間に点在する伽藍は、古い歴史の重みを感じさせ、荘厳な気持ちになりました。

長い歴史の中で、何回かの災難にあわれたそうですが、その都度、心ある方々によって支えられ、今日を迎えられた様です。

曹洞宗の開祖様である、道元禅師様、お弟子の懐装禅師様の伝燈を受けつがれた義介禅師様が、大乗寺を開かれ、以後、脈々とその教えを守り、育ててこられた方々によって、すばらしい曹洞宗が現存していることを痛感させられました。

今回の旅行は、曹洞宗の成り立ちを勉強させていただくと共に、善光寺様の輝かしい祖先を知ることができ、大変感銘しております。

檀家の一員として、多少なりとも曹洞宗のお教えを身に付け、これからの日々を過ごさせていただきたいと思っております。

父と私、追悼の旅

堀　貴子

妻を亡くした父、母を亡くした私。母が他界し四年の年月があっと言う間に過ぎたものの未だ心の傷が癒されないでいる父と私。母の他界後、善光寺様とお付き合いさせていただき、大変なご縁を感じております。特に父にとりまして、善光寺様は何より心の支えになっている様です。

善光寺様北陸参拝の旅が紹介されると、一緒に行こうとすぐ話がまとまり、旅に参加する事になりました。お寺様との旅は一体どの様な旅になるのかしら？　興味津々でした。

集合場所は羽田空港時計柱八番前。私の鞄の中には大好きな母の写真が入っています。少し緊張し集合場所へと向かいました。到着すると物凄い人数の檀家様で集合場所があふれていました。これも善光寺様の人気の証拠だと感じました。

飛行機に乗り込み、あっと言う間に小松空港に着きました。金沢市内を見学し、大乗寺様へ。五月初旬、新緑に囲まれた大乗寺様は、決して派手ではないのに雄大で威厳と品格を感じるお寺でした。修行をする僧堂をご案内下さいましたが、畳一枚分も無いと思われる空間が修行と寝食する場所であるとのご説明でした。自宅で自由に生活し、自分の部屋がある私の贅沢さをその時ばかりは恥ずかしく思いました。

お寺で身も心も洗われた後、楽しみにしていた和倉温泉へ。美味しい食事と海を見下ろしながら入る露天風呂。あー来て良かった。部屋割は檀家様と五人部屋でした。温泉に浸かりながら、又枕を並べて同室の檀家様達と夜遅くまでたくさんおしゃべりをしました。それぞれ色々

な人生を経験しておられ、たくましく強く生きていらっしゃる事を知りました。現在もその時お知り合いになりました檀家様とお近付きいただいております。

二日目は永光寺様へ参拝しました。大自然の広大な敷地に、歴史と迫力さえ感じるお寺でした。長い階段を上りながら唱えるお経。私はこの旅二日目にして、立派な檀家になった様に錯覚してしまうほどでした。

永光寺様を後にしバスはお土産屋さんへ走りました。甘いお菓子と能登産の海産物を持ちきれないほど求め、羽田空港へ帰ってきました。

善光寺様檀家初心者の私は、何もわからず何の知識も無いまま、この旅に参加させていただきましたが、この様な機会をお与え下さいました善光寺様へ心から感謝申し上げると共に、常に私達親子に温かいまなざしを注いで下さいました皆々様にお礼を申し上げます。

有難うございました。そして、次の旅も期待し、お待ち申し上げております。

曹洞宗の源流を訪ねて

豊島　節夫

五月善光寺北陸参拝一泊二日の旅に参加しました。

九日早朝、羽田空港集合場所には参加する皆さんの笑顔がとても明るいものでした。

小松空港からバス二台に分乗して、安宅の関所跡を見物し兼六園に移動です。兼六園では、東郷先生が大阪から直行して中華式に熱烈歓迎してくれ謝謝でした。昼食にはアルコールも抜き、真面目に大乗寺を目指しました。

有形文化財の重厚な山門から、仏殿、法堂に案内いただき、東住職より大乗寺の歴史と現在の状況を懇切丁寧に教えていただき、合掌を繰り返すばかりでした。

開山した徹通義介禅師の七〇〇回遠忌を迎え

る準備も大変なことだろうと推測しながら、和倉温泉の宿泊先へと進みました。

夜は、楽しく皆さん、温泉・新鮮な魚料理、そして地酒に私は大満足でした。

一夜明けた和倉の朝は曇天でしたが、目指す永光寺迄はバスで小一時間で到着。

永光寺は七〇〇年前に曹洞宗太祖瑩山禅師が創建されたようですが、説明する屋敷老師の話に感激し寄進をされた人も沢山いました。

裏山に登り曹洞宗・源流の五老の遺品を埋納された五老峯に手を合わせました。

参拝し善男善女になったのに、帰りのバスでは雷雨に見舞われましたが無事帰浜。

今回参加して感じたことは、盛り沢山の場所に移動時間をかけて動くより、時間をたっぷりとった講話のある今回のような旅は、私個人としては非常に勉強にもなり有難いもので、自然に手を合わせ頭を垂れるものでした。（合掌）

修行僧堂―東香山大乗寺

戸澤　洋太

この度、私は、博志住職のもと、得度式をし、僧侶となった。大乗寺へは来春上山し、私が本格的に修行にとりくむ寺である。

大乗寺は、一二八九年（鎌倉時代後半）永平寺の第三世・徹通義介禅師が開山された。永平寺、總持寺とならび長い歴史がある。現在の住職は前駒澤女子大学長で、善光寺にもたびたび講演にいらした東隆眞老師である。

二十六世中興月舟宗胡禅師、二十七世復古卍山道白禅師は、道元禅師の古風を尊重し清規をととのえ、「規矩大乗（きくたいじょう）」の名を天下に知らしめ、禅のきびしい修行道場として世にその名を高められた。

住職から、この寺を修行先に勧められたのは、私にとって厳しい修行ができる寺だという理由に違いないと思っている。

僧堂は中心に土間があり回廊に囲まれた五十畳ほどで、修行僧十余名がここで坐禅、寝食すべてを済ませている。食事も修行僧がつくる。開祖道元禅師は食事をつくることも修行のひとつとして重視されている。修行僧、雲水の日常生活は一人たたみ一畳での簡素極まるものである。

修行を始めた以上は、一生続けるのが本義である。坐禅中は考えてはいけないということはない。修行を重ねれば余計なことを考えなくなるのだろう。我慢も感じなくなるのだろう。

私は高校時代、五木寛之の「生きるヒント」を読んでから仏教に関心をもち、自分の生き方について仏教からヒントを得たいと思った。駒澤大学の仏教学科へ進学し禅を学び、建学の理念である「行学一如」、修行と修学は一体である

という禅の思想に興味をもった。その後、善光寺の坐禅会で住職と出会い、現在は僧堂修行に行く前の指導を受けている。

僧堂の修行生活では覚えることも多く、要領が悪く行動が遅い私にとっては不安である。睡眠時間も少なく食事も質、量ともに今の生活とは異なり、日常の細々とした作法も限りなくあるらしい。

東老師は、大乗寺は曹洞宗にとって尊い存在、普く人々に広く開かれた寺院であり、単に、観光寺院にはしたくない。「仏法を通して、人心の救済と世のためになる人を育てる」を理念に掲げ、伝統を継承し、発展、興隆させたいと、力強いお説話をいただいた。感動と熱いひとときを過ごし、やがて、ご老師にお見送り賜る。寺をあとにした時のすがすがしさは忘れることができない。

〈連載〉

『普勧坐禅儀』に学ぶ　その二

駒澤女子大学教授　安藤嘉則

普勧坐禅儀

原るに夫れ道本円通、争でか修証を仮らん、宗乗自在、何ぞ工夫を費やさん。況や全体迥かに塵埃を出ず、孰か払拭の手段を信ぜん。（原漢文）

（現代語訳）

「よくよく考えてみるに、仏道は元来すべての人にまどかに行きわたっているものであるから、どうしてあらためて修行や証（さとり）を必要としよう。仏法は誰でも自由に使いこなしているものであるから、どうしてさらにそれを得ようと工夫することがあろう。ましてや仏道の全体は塵や埃（迷いや汚れ）をはるかに超えたものであるから、どうしてこれを振り払う手段を必要としよう。」

私たちがこの道元禅師のさまざまな著作にふれるとき、ほとんどの人が最初に言葉の難解さ、そしてその深遠な哲理につきあたるのではないかと思います。この『普勧坐禅儀』冒頭の「原

るに夫れ道本円通」の一文にしても、大抵の方はなにやら難しい言葉のハードルを感じるのではないかと思います。もともと漢文で書かれていたからという理由もありましょう。しかし辞書的な意味がわかっていても道元禅師の著作はとても難しいと思います。

たとえば道元禅師の主著『正法眼蔵』は日本語で禅の真髄を示したもので、岩波文庫本もありますので、だれでも気軽に手に取ることができます。試しにその最初の方にある有名な「現成公案」の巻を繙いてみてください。冒頭「諸法の仏法なる時節、すなわち迷悟あり、修行あり生あり死あり、諸仏あり衆生あり。」と出てきますが、この一行目からまずお手上げだと思います。この場合、特に難解な仏教用語は使われていません。それでも「なぜ諸法（もろもろの存在）が仏法なのか」で戸惑うでしょうし、その時なぜ迷いと悟り、生と死などがあるのかで迷うはずです。この巻は最初からとても高い関門が用意されているのです。

そこで図書館などで、この「現成公案」のさまざまな現代語訳を参照してみてください。森本和夫先生の『正法眼蔵入門』（朝日選書）はこの「現成公案」のさまざまな現代語訳を列挙し、それらの訳文を比較検討していて大変参考になる便利な本ですが、これを読みますと、この「諸法の仏法なる」の一段だけでも、師家や学者によってさまざまな解釈がなされていることに驚くはずです。この九月に日本印度学仏教学会の学術大会に参加してまいりましたが、この冒頭の解釈について曹洞宗学の第一線にある気鋭の先生が新たな解釈を発表なさっていました。

このように道元禅師の書かれたものは、一般的に古典といわれるような書物とは違うのではないかと思わざるをえないのです。それは読んでいる自分自身のあり方そのものを問いかけら

れているような思いさえいたします。まずは、きちんと出典や教理をふまえた上で理解することもとても大事なのですが、しかし机上で難解な思想的問題をこねくり回していると、かえって大切なところが見えなくなってしまいます。道元禅師はあくまで坐禅に徹した日々の中からひとつひとつの言葉を発しているというところをまず心得なければなりません。

この『普勧坐禅儀』は日本で最初に坐禅の意義とその方法を示したもので、道元禅師の仏法を理解する上での出発点といってもよい書物なのです。そこで『普勧坐禅儀』の内容の説明に入りましょう。

最初に出てくる「道本円通」の「道」とは仏道であり、またそれは真実そのものとしてされます。一般的には「道」という語は、ある目的までの道のりを指します。つまりあくまで目的地に至るまでの前提と考えられ、「仏道」という

と、大抵は「仏に至る道」と理解されています。

しかし「道心」といった場合、悟りを求める心であり、「道」は単なる道筋の意味ではありません。この場合「道」そのものに深い意味、究極の意味がこめられているのです。道を悟りに至るための手段、中途段階と受け止めている限り、道の本質を見失ってしまうのです。

道元禅師は先の「現成公案」で「仏道をならうというは自己をならうなり。」とおっしゃっています。遠いかなたの仏世界に向かって歩む仏道ではなく、今ここに息づく現実の自己そのものをみつめ、解放されていく学び、自己への気づきがこの一文に示されているのです。そこから雀は雀としてチュンチュン、カラスはカラスとしてカーカー、それぞれがそれぞれの自己の働きを精一杯顕わしているあり方が見えてきます。そこには人の分別の手あかがついていないところ、あらゆる存在に真実が丸出しになった

姿（諸法実相）が展開されています。

しかし人は天地のさまざまな恵みを受けて生きていながら普段はそれを意識することもありません。あたかも空気のように当たり前にあって、それがなくなってみてはじめて、人はその絶大な意味・大切さがわかるようなものです。

ふだんは「見れども見えず」といった我々なのですが、まさに死にゆく人の眼に映る風景にその手がかりとなる言葉が残されています。たとえば芥川龍之介は「或旧友へ送る手記」という遺書に次のように書いています。

〈唯自然はかう云ふ僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛し、しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは僕の末期の目に映るからである。僕は他人よりも見、愛し、且又理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には満足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずに措いてくれ給へ。〉

またガンのため三十一歳で亡くなった大阪の井村和清医師も、『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』（祥伝社）のなかで、再発がわかってショックを受けて帰宅したときの不思議な体験を次のように書いています。

〈その日の夕刻。自分のアパートの駐車場に車をとめながら、私は不思議な光景をみていました。世の中が輝いてみえるのです。スーパーに来る買い物客が輝いている。走りまわる子供たちが輝いている。犬が、垂れはじめた稲穂が雑草が、電柱が、小石までが美しく輝いてみえるのです。アパートへ戻って見た妻もまた、手を合わせたいほど尊くみえたのでした〉

以前授業でこの芥川の「末後の眼」を学生に話したとき、しばらくして私の研究室の扉の下に一枚のルーズリーフが投げ込まれていました。名前は不明の手紙でしたが、その学生が高校時

代病気になってまさに死を覚悟したとき、同じような不思議な光景を見たことがつづられていました。

〈目にうつるものすべてが、キラキラと輝いて生きる力に満ちあふれているように感じました。（中略）今は病気も良くなり、そのせいかキラキラとした世界を見ることはありませんが、絶対に忘れることのできない体験でした。〉

我々はかけがえのない命をいただいて当たり前に生きている事実の本当の意味に気づきません。あれがない、これがないといいながら、不満に満ちた現実に直面しています。現実を見るならば、過去に振り回されている人、過去にしがみついている人、過去のトラウマに苦しむ人、そんな人間模様がみえます。「昔あの人はこうだった、あんなひどいことをした」とテープレコーダのように悪口を繰り返す人に会うたびに、この方は要するに過去に生きているんだなと思います。過去のつらい思い出によって新しい心へ切り換えるスイッチを見失っているならば、それはとても悲しいことです。

しかし考えてみれば今日の一日は今日だけなのです。昨日の私は写真やビデオで記録して残したとしても、それは私自身ではありません。昨日はあるようで、実はどこにもなく、どんなにお金をはたいても決して昨日に戻れない厳然たる事実があります。だから今日の命は今日でおしまい。毎日が誕生日であり臨終であるともいえるのです。この今をしっかり生きずにどこに生きようとするのでしょうか。「平常心是れ道」といいますが、この平常をよそにしていったいどこに道（真理）があるのでしょうか。

さて改めて『普勧坐禅儀』の冒頭の一文に戻りますと、この「道本円通、争でか修証を仮らん」というのは、仏道の本来的な立場からいうならば、あらゆるものが真理として丸出しであ

る限り、わざわざ修行とか証（さとり）とかを設定して歩むのではないということです。

「宗乗自在、何ぞ工夫を費やさん。」も同じ意味内容で、宗乗（仏法）を本来自在に使っているはずの我々には本来は工夫努力することや、坐禅修行などは必要ないという意味なのです。

さらに続く「況や全体迥かに塵埃を出ず、孰か払拭の手段を信ぜん。」という一句も、冒頭の主張を六祖慧能が示した詩に基づいて示されたものです。

中国の五祖弘忍禅師が後継者を選ぶにあたり、門下の僧たちに各自の境涯を伝える偈（詩）を求めたところ、優秀であった神秀というものが、次のような偈を廊下に書き記しました。

身は是れ菩提樹
心は明鏡台の如し。
時時に勤めて払拭して、
塵埃を惹かしむること勿れ。

（我が身は菩提樹のごとくであり、心は塵のない鏡台のような境地である。しかし時折心にも塵や埃がつくので払い拭うことが大切だ。心に塵や埃がつかぬよう修行しなくてはならぬ）

しかしそのころ寺の小屋で米つきをしていた慧能が、字は読めないものの、この偈を誦するのを聞いて、字の書ける者にお願いして神秀の偈の横に自分の詩を書き付けたのです。

菩提本樹無し、
明鏡も亦た台に非ず、
本来無一物
何れの処にか塵埃を惹かん。

（悟りは樹木に喩えるようなものではなし、心も鏡台のようなものではない。本来は一物もないのです。どこに払いぬぐうべき塵や埃があるのだろうか）

神秀は、我が身は菩提樹で、心は澄み切った

鏡のようだけれど、それでも心の鏡に塵や埃がついて曇ってしまう、だからいつもそれらを払い拭う修行をしなければならないといっていました。しかし慧能は元来身も心も菩提樹や明鏡のようなものではなく、そもそも払いのけねばならぬ塵や埃もないのだといったのです。ここに何のとらわれもない徹底した慧能の「無一物」の境涯が示されています。

『普勧坐禅儀』では、この慧能の偈の境地を受けて「あらゆるものは遙かに塵や埃を離れていて、いったいどうして払い拭うという手段を弄する必要があろうか」と示されていたのであり、それは「道本円通」の世界を示していたのです。つまり本来は坐禅などの修行は必要なしということなのです。

この『普勧坐禅儀』は坐禅を天下に明らかにするための本であるのに、いったい何故このような主張がなされているのでしょうか。そしてそれにもかかわらず何故我々は坐禅をしなければならないか、こうしたことを次号で説明していきたいと思います。

人々の心を癒す観音さま

ほほえみ子安観音開眼式

▲導師、本寺光真寺住職様による開眼式

▲黒田俊雄老師と博志住職

◀式後参列者の皆様と

▲参列者の皆様も共に読経

◀博志住職より（株）日ノ出屋石材店
社長 臼井瑞穂様に感謝状授与

善光寺に新しい表情が生まれました。不動殿前中庭のほほえみ子安観音です。たくさんの子どもたちとその成長を温かく見守る観音さまの優しいお姿は、忙しい時代に生きる多くの人々の心を癒すでしょう。そして、五月十八日、本寺光真寺黒田俊雄老師を導師にお招きして、開眼式が行われました。

子安観音

善光寺中庭、お不動明王さま（不動殿）と釈迦如来さま（釈迦殿）、丁度その真中辺り、新しく観音菩薩さまがお座りになりました。先に鎮座ましているお地蔵さま、その群の中に、ガードされるようにおおらかなさま、いかにも成寿の山におさまったという観致します。奥ゆかしき哉、観世音菩薩さま。

幼子抱いてお座りのお姿、丈零五丈、本寺光真寺俊雄大和尚さまご尊顔拝され即座に「ほほえみ子安観音菩薩」とご尊称されたほどに、このほほえみマコト瞬時、人をつつみ込んでしまう。たれでも「遇い難くして、いま遇うこと得たり」いいしれぬ幸福感とやすらぎに充たされる。

この新鮮な感動、キット菩薩さまより、放たれる慈悲の光が偉大な母胎となって、対するものにいのちの躍動を与えているのかもしれない。ただそこにいるだけで癒され、しあわせを思う。そんな観音さまなのです。

観音さまは三十代の働き盛り、彫り出されて以来、久しく光を閉ざし、ある一隅に坐したままだった。参道沿いに商う由緒ある石材屋さん、昨春来、社屋拡張中のところ、数十年振り蔵の整理などしていたという。多分に先代さまが彫られたであろうご一体が突然現われ出た。ハアーあまりの神々しさに思わず合掌。すると座像のお方さまより「此の方連れて行かれ、連れていってくだされ」と囁かれたように思うのです。大概商う商品にそんな感慨は起こらない、と仰るからほんとうなのかもしれない。座像が凝視するところ、参道を跨ぎ直線で三十三メートル彼方善光寺中庭辺り、ここに在ってはいけないと思う刹那、はや足は善光寺に向かっていたという。丁度、寺は大圓和尚さま三回忌法要を控え、その準備に追われていた。「ご住職、ご住職、チョット来てください、見てください」社長さんの只事でない哮びに兎角従った。早速蔵に案内され、正面に坐したご一体に浴する、光景を目のあたりにし、嗚呼。住職思わず佇み合掌低頭。しばし動くことも、声を発することも叶わなかったという。ときの感動たるや、想像を超え大変な発見であったようです。ややあって「ああこれだ、このお方だ」社長さんも追いうちかけるように「でしょう、そうですよネ」対話にはなっていない、なぜこんなやりとりなのか、意識のないままに全く啐啄同事。わけもなくお二人は手をとり合い、目がしらを熱くしたと聞かされる。うーん、この凡夫思うに多分、観音さまに踊らされ、術にはめられたに違いないと思った。なにせ出来すぎているのです。

しかしこの現象なにか伏線があるように思えてなりません。遡(さかのぼっ)て五年前即ち二〇〇二年のこと、大圓和尚さまご壮健のころ世界中が注視するＦＩＦＡワールドカップ、その開会式が横浜国立競技場でとり行われていた。

善光寺では恒例のお盆法会の真最中、記念(『成寿』三十四号)の講演は「健康と生き方」という身近な問題、関心が高くこの時ばかりは二日間に亘り連日参加の聴講者に溢れ大盛況。講師は、真言宗法隆寺を抱く奈良信貴山に籠り五年の日月をかけ、千日行に挑む、全盲というハンディをのりこえ、ついに奇蹟の満願を果たした仙人密峰師だったのです。いまでは世界的になってしまわれましたが、「気・生命エネルギーの権威者」として学会、メディアでも再々登場されるお方。

この方、山内を伝え歩きしながら中庭に降り立つ。「んーここは気が充満しています」すべてのパワーがここに凝縮しています、といいながら両手を広げ香をあびるような仕草、さらに東西南北になにがあるのか、尋ねては確認されていた。最後に西に向かい両手を翳(かざ)し「向こうになにがありますか」ハイ、参道沿いに住宅と石材屋さんがあります。「違うなあ、その向こうになにがありますか」ハイ丘陵地に墓地群です。「なにか大きな仏像がありませんか」いいえ見当りません。「おかしいな、ぼくの躰に強烈な振動と

波動を感じます。なにか目に見えないものがこちらに迫っているようです。いちど確認して下さい」

ここまでくるとこの凡夫、さもありげなことを仰る、まゆつばをかんじてしまう。後日談、なんとなく気になり大圓和尚と二人で丘陵地を歩き回り、「らしきもの」を探し回ったことを思い出します。さて仏像、のち事情を伺い私には覚えあり、なんともいい知れぬショック、なんだか背すじにつめたいものを戴き、それはそれは並でなかったように思います。のち倫子令夫人に伺ったのですが、大圓さまも何かと気にして、何度か探し回り、「オレの信仰心と供養が足りないという仏さまからの示唆の様に思える」と以来一所懸命供養尽しておりましたと述懐。承りながらどうにも自身の足りなさを痛感致しました。この凡夫至らずなにかにつけて否定する、「そんなことはない」と恥入るばかりです。

明けて間もなく、私は密峰仙人にデンワにて仔細を報告する。多分によろこんでいただけると期待しておりましたが、なんとも実に坦坦と、「そうですか、安心しました、善光寺の中庭になくてはならない守護神、お迎えするのが少しおそかったように思います。そのご仏像、多くの悩みと苦しみを受け入れる用意と準備がすっかり整っています」。「トーゴさん、私は目が見えません」ハアー承知しています。「あなたは目が見えるのに見えないと云う、なぜ私に見えたかわかりますか?」…。どうもこのお方、私をしてお前こそ、全盲だとおっしゃっているように思う。MRIのベッドに縛られ、ガンガン、ゴンゴン打ちのめされてしまいました。もしも大圓さまご存命なら、「さてなんと仰せる」ハーイハイッなんにも申しあげることはございませんーだろうか、そんなことを想像すると笑えてしまう。

「目に見えぬ仏の心に通うこそ人の心のまことなり。」

いよいよ観音さまお遷しのとき、果たして狭い群像の空間に入るものなのか、収まるものなのか、メジャーで採寸する。祭壇と賽銭箱を前に引き出すと、全く寸分違わず、ぴったりと納まってしまう。まさしく奇蹟、驚異でした。

先に計算ずみだったのか、数字に弱いと自慢しておいでだった大圓和尚さまでした。社長さんも唯々感嘆しきり。このご一体、石材屋さんが、一切すべて寺に献上し喜捨させていただきたい、どうぞおまかせくださいと云われる。ご住職も気弱だから断る勇気もなく、只々お申し出に是れ従う。さても奈良の仙人、この結末を承知していたのだろうか、マコト恐ろしきこと。翻って善光寺の大圓武志大和尚というお方、やっぱり化物だった。いまさらながらあなかしこ畏れ多くて候です。

さてさて中庭群像の揃い踏み、その責任と役割について聞きかじりを程程に。地蔵菩薩さまは、殊に無力な子たちを救い、さらには人々の願いを聞き届け、衆生を救うため、この世に現われた救世主。礼拝するときは大きな声で「**オンカーカー　カビンサンマーエイ薩婆訶**」と唱える。

一方観音菩薩さまは、この世で悩み苦しんでいる人々が、願うなら救いの手をさしのべ、現世の現実的な願いを叶えてくださる慈悲の仏さま。観音さまの得意はさまざまな姿に形を変え、変化自在の菩薩さま、基本的には一面二臂から十一面千手まで、三百六十度にわたって観聞できる術をもち、人々にとってごく身近な願いごとに超現象をもってお応えくださる。このおちからは計り知れない。礼拝するときは「**オンアロリキヤソワカ**」と繰返しお唱えする。さすればキット菩薩さまに届くものと私も信じています。ただ承知しておきたいことは、「縁なき衆生は度し難し」とも申されており、すべての人々を救いたい、でもこれはまずむずかしい、みながみな救われる訳ではない、菩薩の存在を知らぬ人、希いすがって願わない人、いわゆる仏縁のない人は、手の差しのべようがないと、申されておるようです。要は観音さま、拝む人の心にまかせて手を差しのべられる、ということになります。

かくして開眼法要のときが来た。導師は光真寺俊雄老師、十二時の開眼に近隣のご住職と僧侶方が本堂に隨喜、中庭は立錐の余地なく山内、寺族と檀信徒たちが隨喜の涙。観音讃偈に続いて心経唱和、ご住職から香語に添え「ほほえみ子安観音菩薩」のここに至った経緯と由来をいただく。読経、鳴りものその響き実に成寿の山に木霊する。

紅白をめぐらす善光寺山内、五月の空は遠く

澄み雲ひとつない。やがてエピローグ、導師ご法話の最中、尺寸もあろうローソクが煌煌と立ちのぼっていた。ところが突如、灯明が渦を巻き、大きく揺らぐ。導師の衣まで宙に舞い、果てはお躰に巻きつく始末、静寂だった成寿の山がうち騒ぎ、どこから来たか、鳥たちの大群、種類乱れての大合唱がはじまった。わけ入るように鶯の谷渡り。

ひとときご法話できる状態ではなかった。参列者も大空を見上げなんともいえぬ霊験さを観じていた。そのときどなたか「ああ千の風だ」合わせるように吹き出す、だれとなく「千の風だ」ご導師まで引き込まれ「千の風、そのようですな」果てはみんな両手を空にかざし天空を仰いでいる。彼の歌い手と同じポーズ。わずか二・三分の椿事。

またもとの静寂に戻る。灯明も天に向かいてひと筋、さらに煌煌とたちのぼっていた。

やがてお開きになる。のち直会の席上、もっぱら、千の風、鳥の大合唱に集中、ご老師も話題にのって、「間々あることです、しかし今日はいつになく激しいと思いました、衣が頭りを被いお先まっくらでしたから。人は静の中に籠ると心が空になります。そんなとき周囲の音や、光や風、とり、匂いまで五体に浸み反応するものです。今日ご開眼遊ばされたほほえみ子安観音菩薩さま、大自然と一体です。天空のすべて森羅万象ことごとく救済、その計らいをおはじめになった瞬間だったと思います。みんなみんな随喜しておりました。大圓武志大和尚もよろこんでいることと思います、ありがたいことです」「キットキットご利益おおき菩薩さまですヨ。皆様もしっかりお参りください」「うぐいすや文字も知らず法聞けよ」とネ。お賽銭多きこと願いつつ菩薩さまに肖かる大和尚さま、美事に結んでくださいました。薩婆訶　合掌。

春彼岸法要法話

彼岸と供養

駒澤大学名誉教授　佐々木宏幹

平成十九年度の春彼岸法会が三月十九日、午前十一時、午後二時の二回にわたって善光寺釈迦殿で行われました。

各回とも、まず駒澤大学名誉教授佐々木宏幹先生による法話から始まりました。「彼岸と供養」と題する法話では彼岸の意味を学び、なぜ供養するのか、そして、現代社会の中での意義をお話いただきました。引き続いて、博志住職の導師で厳かに法要が執り行われました。

お集まりいただいた檀信徒の皆様も佐々木先生のお話に導かれ、供養による人と人の結びつきを改めて実感し、手を合わせました。

I　はじめに

「暑さ寒さも彼岸まで」という諺がありますね。「暑さ寒さも彼岸きり」というのもあります。これは寒処、寒さも暑さも彼岸、春と秋の彼岸頃になるとそれぞれ力が衰えていい季節になるということをたとえた言葉であります。ところが今日は非常に寒いですね。「春は名のみの風の寒さや」という詠もあります。それは「暑さ寒さも彼岸まで」というのとはまた違った意味合いでありまして、いかに日本人が気候や天候に対して敏感に反応するか、それを物語っていると思います。

お彼岸という仏様を供養する日は、お盆はインドに起源をもちますが、このお彼岸という法要・法会はインド起源ではなく中国でもなくて日本であるというのが明らかになっている事実です。どうして日本で彼岸という儀礼がこんな

に盛んになったか。それは彼岸という季節の変わり目、節目に仏様、もっと具体的にいうと死者であるとか御先祖様でありますが、そういう方々と生きている者とが交流する機会だからです。難しい言葉だと「感応道交」など、お坊様方から教わったと思いますが、要するに深い感覚のレベルで見えない世界の存在と見える我々とが交流する、そういう時期だというふうにいわれております。それが日本起源なのですから、仏教以前からそういう御先祖様や死者達と睦み合う、こういう機会がだいたい年に四回あったといわれているわけです。

一回目はお正月。お正月に年神を祀っておりますが、年神の本体はなんでしょうか。研究者によると年神の本体は御先祖様だということがはっきりしておりまして、皆さんの中には柳田国男という非常に高名な民俗学者を知っている方がおられると思いますが、柳田先生が『先祖の話』という有名な本をお書きになっていて、その中で論じている中に四度くらい、あるいは五回来ることもあるのですが、だいたい四回ぐらい御先祖様がこの世に訪ねてこられる時があった。

まずお正月にやってくる。これが一年の大きな節目でありますから、去年は良くなかったし健康もうまくいかなかったけれども、今年こそはうまくいきますように、昨年は景気が悪かっ

たけれど、今年は景気がよくなりますように、というように、昨年を反省し新しい年に期待や理想を高く掲げる。こういう時期がお正月で、先祖代々の方々がやって来て「お前たち、生きている者よ、がんばれよ」と励ましてくれる。そこでお餅をあげたり雑煮をあげたりお酒をあげたりして交歓してお別れする。それがお正月です。正月とお盆の行事が非常に似ていることに目をつけたのが柳田先生であります。やはり、迎えて送る。迎えるためには、すす掃きをしたりして家を清めます。お盆の時はお坊様が棚経に来るというので、きれいに内をお掃除して待っている。それもよく似ています。

それから春の彼岸ですね。これは一週間御先祖との交流があります。どうして日本人は春と秋の季節の節目にそういうことやったのでしょうか。これは、お彼岸というのはちょうどひと月遅れでやりますと四月になりますね。今は新暦で数えますが、旧暦ではちょうど農作業が始まる時でありました。近代日本以前は七〇％以上が農民でありまして、権力者も何万石とか何千石というお米の石高でその力を誇った、そういう時代が長く続きました。そうしますと、お米が穫れないということは日本民族の生命、運命にかかわることでありますから、お米に非常に関心があった。だからお米の一粒一粒に非常に信仰をもったのです。これは稲霊という霊が

ありますが、稲という字の下に霊を書く。それを稲レイとは読ませないでイナダマと呼んでいるんですね。その稲霊信仰を穀霊信仰とも言います。

とにかく、稲を、早苗を苗代からもって来てみんなで植える。というのも今では非常に牧歌的な思い出話になりつつありますが、年輩の人だと、田舎でそういうものを見たとか、泥の中へ入って田植えをした懐かしい思い出をお持ちの方も少なくないかと思います。その稲に一番大事なものはなにかというと、お天道様だということです。太陽です。ですからその太陽が上手く照ってくれたときに農民は幸せになるわけです。

天皇家というのは日本の民族を支配した一番上の責任者でありますが、その神はなにかというと、天皇家の御先祖はお伊勢さんです。お伊勢さんは何が祀られているかというと天照大神です。天を照らす大神と書きます。天を照らす大神というのは太陽ですから、お日様を拝んでおった。なぜお日様かというと、天皇が統治する日本人は、農業で生活を立てておった。だから太陽が重要です。そこでお彼岸というのはちょうど「暑さ寒さも彼岸まで」であり、この日からまた季節のリズムが変わっていくわけですね。中日からだんだん昼が長くなって太陽が動ける時間が長くなりますね。そういう時期に太陽に対して今年も豊年満作でありますようにと願った。日に対して願ったから、日に対して願うと書いて「ひがん」と読んだ。ところが仏教が入ってきますとその日にお願いする「日願」に彼の岸と書いて「彼岸」。「日願」と「彼岸」は語呂合わせできちっといくから、お彼岸というのが日本人にとってわかりやすかったという説があります。これは五来重（こらいしげる）という、非常に有名な仏教民俗学者の説です。五来さんが日本中をずっ

と歩いて調べたのです。

Ⅱ　「彼岸」と「此岸」

それではお彼岸というのは仏教的になんであろうかというと、彼岸の反対は「此岸」、この岸なのです。この岸に対して彼の岸なわけです。もうひとつの書き方は彼方と此方という言い方があります。宗教的、仏教的には彼岸と此岸ですが、一般的には此方と彼方。彼方と此方をどう区別したかというと、私どもの日常生活ではドロドロごたごたが続き、欲がお互いに張り合っている闘争のありようをしております。毎日のようにそれが繰り返されていく。だから人生は苦であるとお釈迦様は悟ったというのです。これが此方です。

苦は歯が痛いとか喉が痛いというのも苦でありますが、仏教はもっと大きい立場から苦を解釈いたしまして、《思いどおりにならない》こと、みなさん人生思い通りに毎日なっていますか？ならないことばっかり多いですね。一生を通しても思い通りにならないことだらけです。がっかりしたとか、もちろん病気も入ります。どっかに癌が見つかったとか、株を買ったら急に下がったとか、みんな思い通りにならない。それをお釈迦様の透徹した眼差しから見ると、欲の皮が張り過ぎているということになるし、「俺が俺が」が中心だからということになる。

ところが川を渡って彼岸へいくと、そういう欲がコントロールされて非常に和やいだ、和やかな心をもつような領域があって、そこの中心にお釈迦様という、人生苦を解決しようとしてさんざんご苦労の上悟りの境地を開き、それを思想、考え方としてあまねく広めたお釈迦様がおられる。だからせめてお釈迦さんの心になってみたいと願う時節がこのお彼岸なわけです。

日常生活では、そろばん勘定もしなくてはいけないし、嘘は方便などといって嘘もつかなくてはいけない。けれどもせめてお彼岸の間はお釈迦さんやお先祖様というお釈迦様のお弟子さんになったような方々のような境地に至った人を思い描きながら、平安で落ち着いた生活ができますようにという願いをこめるのがこの「彼岸」です。

道元禅師は「到彼岸」ということを言っておられます。正法眼蔵という主著の中で到彼岸というのは「到る」「彼岸」ですね。これに対して今度は「彼岸到」という、ひっくりかえして「到」を後に書いているんです。彼岸が至る。「彼岸に至る」と「彼岸が至る」どういうことか。一般の人々が修行をして彼岸に至ると思っているけれども、修行しているその場にもうすでに彼岸が現れているんだということです。ここが肝心です。そうすると在家のみなさんがこうしてお忙しいところをお寺に集まって、方丈様方とありがたいお経を一緒に唱和して仏さんに手を合わせる、それが「彼岸到」なのです。お寺という聖なる場所に来て手を合わせて姿勢をただしているということを仏道とみれば、道元禅師のおっしゃる到彼岸ではなくて彼岸到がそこにあらわれているということです。

これが今日のお話の結論なんですが、なぜそういうことがいえるのかということをこれから申します。彼岸、彼の岸と私どものようなこの岸にいる者。それをこんどは死者のいる仏様がいる「彼岸」と、生者がいる「此岸」というふうに分けてそこから何がみえるかということをまずお話します。現代のように親が子を殺し、子が親を殺し、先生が生徒をいじめる、こういう時代がなぜ出てきたのだろう。今日のように非常に乱痴気で、反面、冷たくて、ゴタゴタしている、そういう社会を少しでも直していく、

あるいは改革していくためにはどういうことが必要か。それにもうひとつ彼岸と供養ということ。その供養の心と行動が今の教育に対してどういう意味を持つのだろうか、何を役割とするのかに触れて今日のお話を終わりにしたいと思います。

前置きが長くなりましたので、まず彼岸と彼方とについて説明するために、まず私は黒人霊歌をとりあげてみました。みなさんも歌が得意な人はどこか、多分、中学校あたりで学んでいると思いますが、「若き日はや夢とすぎ」で始まる歌。人生まだ若いぞ若いぞと思っていたらいつの間にか年をとっていた。なにもみなさんだけではありません。そういう法則性にのらない人類はどこにもいなかった。だから「若き日はや夢とすぎ、友らはみなこの世を去りて、彼方のよき地に眠り、かすかに我を呼ぶ、オールドブラックジョー」。これは黒人ですから「ブラック」です。アメリカは黒人の力を借りて白人達が立派な社会をつくったのですが、黒人の人たちは綿花をどんどん栽培しました。元来アメリカ人が作っていたのですが、人手が足りず、アフリカから多くの人々を拉致した。何十万何百万人という人々を奴隷船の舟底にいれて、ミシシッピー川のところまで連れて来たのです。どうしてそういうことをキリスト教国の人々であるアメリカ人が行ったのかというのは、研究す

ればするほど不思議な話なのですが、人間というものは罪大きいものなのですね。だから人様のことはあまり言えないわけですが、とにかくアメリカの近代史というものは、まだ若い国ですから、あの中にはそうした悲劇があったということを心の奥底に秘めておきましょう。親と別れ、子と別れて連れて来られた人たちが労働させられて、そこから悲しみの歌として黒人たちが歌ったのがこの歌でありました。

これはアフリカでも同じようでありますが、「亡くなった人はどこ行くの？」「近くではなくて遠くにだんだん行く。遠くに行ってこの世の人たちに働きかけてくれているんだ」。それが彼方の良き地に眠り、ということになります。これはグーグーいびきをかいて眠っているのではなくて、そこに安らいでいるぐらいに意味をとったらいいです。この歌の肝心なことは、若い日はどんどん過ぎていくということです。そして必ず死にます。死んで終わりかというと、死んでそこで終わりという民族は地球上にはいないのです。死んでも必ずどこかにいる。仏教だったら仏国土、あるいは彼岸、お浄土にいる。これらの言葉はみなさんも知っていると思いますが、そういうあの世の存在についての感覚はどんな民族ももっています。ただそれを哲学的に非常に高度に深めたものと、非常に単純に感じているところとあって、黒人の人たちは読んで字の

ごとくで、もう解説するまでもないと思います。

要するに人はみなこの世を去って彼方の「よき地」というのは彼岸です。彼岸は仏教流にいうとお釈迦様がおられるところです。そこで「眠り」ということは、安らいだ状態になっていることです。そしてこの世の人たちに語りかける。自分を呼んでくれているんですから起きている。「良き地に眠りかすかに我を呼ぶ」。心をすましてお墓の前、仏壇の前、仏さんの前で静かに目を半分ぐらい閉じて思いを込めますと、みなさんも亡き人がそこに現れてくる。あるいは心の中に御先祖の姿が浮かぶ。これが「かすかに我を呼ぶ」ということです。亡き人は生きている人たちがうまくいくようにあの世から願っている。それを感じていてくれる。それがもっとも密度が高く、感じられる時がこの彼岸とお盆だということになります。

お彼岸はお盆と並んで死者あるいはあの世との交流が盛んになる時であるという例について話します。新潟県の北魚沼郡はお彼岸でもまだ雪の中です。ここではお彼岸の入りの日に、スコップ、シャベルなんかを持ってお墓に行って、一メートル、今は雪が少なくなっているようですが、雪をはらってお墓を綺麗にします。そこに子どもたちが行って藁に火をつけて「ジジゴタチー、ババゴタチーこのあかしについてござれーござれー」と言いながら家につれて来る。つまり、おじいちゃん、おばあちゃんこの灯について家に来てと。家へ来るとぼた餅であるとかお供え物があってそこで供養をしてあげる、ということになります。

Ⅲ　供養とは

彼岸と供養でありますが、既にだいじな結論ですよと申しました通り、到彼岸です。仏教は

どういう教えかというと、彼岸に至る教えです。一般的にわかりやすく言うとそうなんですね。到彼岸というのは、彼岸には仏様がおられる、お釈迦様がおられる。だからそこに到ること、これが「成仏」、仏になるということですが、その教えが仏教です。彼岸は「此岸」に対する語で、迷いの世界というのが「此岸」なのです。

それに対してお釈迦さんの世界は「悟りの世界」、あるいは世の中の真理に目覚め、宇宙と人間の真実に目覚めた人たちの世界です。お悟りになった方、つまり「仏さま」はどういう方か。現代風の言葉でいうと「思いやりの心」を無限にもった方といえるでしょう。これを仏教語で言うと「慈悲」ということになります。慈しみと悲しみを書きますね。「慈悲」よりも「思いやり」といったほうがかるいかもしれませんが、わかりやすいと思います。

それに対して「此岸」では、思いやりではなくて「俺が」「俺が」「俺さえよければいい」という世界です。

「彼岸」はそうではない。自分も大事だけれども、他人の悩みや苦しみを自分が味わっているのと同じ程度に味わって対応する。そうなると「彼岸」の心に転じていくわけです。「到彼岸」というのは、そのように考えていきますと、「思いやり」は他人のために何か善いことをしてやろうとの願いの心です。今日はみなさんがここに来られて、亡き多くの人々のためにご供養してあげるのですから、「到彼岸」の行をなさっていると、こういうことになります。

次に「彼岸」は春分、秋分の日を中心に行われるわけはどういうことかは、すでに述べましたから述べません。「日願」と「彼岸」について五来重という学者がそういうことを言っています。このことをお家に帰ってもう一度反芻してみてください。

死者を歓待する、供養するとは、心から歓待するということでありますが、死者を歓待するということは仏教が入ってきて「供養する」ということが広まったからです。どうしてでしょう。仏教以前から死者を拝むという習慣を日本人はもっておりましたが、仏教がやってくると、仏教のお坊さんを通して死者や御先祖を拝むようになりました。どうしてかというと仏教あるいは仏教の教えを奉じて修行をしているお坊さん達の持つ力が、それまでの人々の力よりも大きいということを日本人がわかってきて、お坊さんに頼めば必ず死者は浮かぶものだ、つまりこの世に不平不満があって亡くなった人も、お経の力やお坊さんの行の力によって平安なる心、お釈迦さんと同じような心、あるいはその境地に辿り着くための心に変わっていくのだ、ということが日本人のみなさんや檀信徒の人々に受け入れられたからこそ、今日本は世界有数の仏

教国になったわけです。この力を学問上は「仏力」とか「行力」とか申します。行力の前に修行の「修」を書いて「修行力」といってもいいんです。力と威力の「威」を書いて「神」を書いて「威神力」という語もあります。威神力を持つお坊さんはお釈迦さまと同じに見られたのです。

先頃亡くなったある有名な俳人の句に「春の鳶よりわかれてはたかみつつ」というのがあります。春のこのころになりますと鳶がグルグルグルグル弧を描きながら下から上に昇っていく。そのときに「ピーヒョロロ、ピーヒョロロ」と啼くのです。鷲に似た鳶ですから猛禽類のひとつですが、こう下を見てエサをさがしているのですね。それがピーヒョロロと近寄ってきてはだんだん遠くに弧を描いて飛んでいきます。そしてまた近づいてくる。こうしながらだんだんだんだん天空高く行ってついに見えなくなってしまいます。あれは非常に詩的な風景というのか、日本の田園地帯の典型的な図柄だと思っておりますが、こういう鳶、これが御先祖をこの世の人が祀るというのと同じなんです。今日お彼岸ですからいつでも仏壇で拝んでいるかもしれないけれど、特別の日には仏さんの方が近づいてくる。近づいてきながら一週間経つと遠ざかって行く。またお盆に近づいてくる。秋も彼岸に近づいてくる。これを供養し歓待するわけです。そうするとだんだん高く高くにいって、やがて仏さんの彼岸に行きっきりになってしまう。それを仏教では涅槃などといいます。涅槃というのは、我々の悪しき欲望が全部コントロールされてお釈迦様・仏さんと同じような心になったのが涅槃でありますが、こう近づいてきてまた離れ離れてやがて天空遥かに行く。あるいは風に乗って行くのです。

死者は生者と交流しながら御先祖になり、仏

の境地に至るのだと、これはご供養によって高まっていくのです。

それでは供養とはどういう意味かについて述べましょう。「供養」は懇ろにもてなすこと、「歓待」とも言いますが懇ろにもてなすことであり、この行為の基盤には相手への思いやりの念、あるいは思いやりの想いがある。思いやりの想いがあるからこそ、みなさんは今日善光寺さんにお集まりになったわけですね。日本人は他の民族と比べますと、ことさらに供養、懇ろにもてなすという行動をより多く積極的にとる民族だというふうに考えられます。なぜかというと、器物動物供養、器物というものは、物でもって物を作るんですね。茶碗でもいいし、お人形でもいいし、針でもいいしなんでもいいのですが、これと動物を懇ろにもてなすという民族が日本人であったわけです。例えばお母さん、おばあちゃんがずっと使っていた針をご供養する。針を祀るような民族はそうないじゃありませんか。それからお人形を使い古して、これはひいおばあちゃんからもらったんだけども、顔がだんだん黒ずんできたので新しい人形に替えましょうという時、ゴミ袋に入れて捨てるということになると、もう日本人ではないですね。小さな人形。私は人形作りの人で、人間国宝ぐらいになった人ですが、この人から実際聞いたことがあるんです。「あの蜷人形を、心を込めて作ってここへ置きますと、夜中にヒソヒソヒソヒソ話をしている。だから心を込めたお人形は私の魂が入っているので生き物ですよ」と、その有名な人形師が私に言ったことがあります。なるほどなと思いました。これを知っておったのが日本人ですからポイ捨てはできない。だから仏閣や神社にお人形を納めて人形供養を、お経をあげたり祝詞をあげたりして供養しているのです。それから仏壇供養、仏壇が古くなったから買い替え

ようという時にゴミに捨てようという人はまずいない。ずーっとゴミを注意しているのですが仏壇は見たことがないんです。やはり仏壇もお寺さんに納める。そしてそこで火葬にしてもらうのですから人間と同じように扱うわけです。下関に行くとフグを採っていますから、フグのお陰だというので、供養をします。うなぎの供養もします。シロアリは今や家を食べてしまうということで嫌われていますが、シロアリに毒

性のフマキロンを撒いて、殺すでしょ。そうするとその人々がシロアリに対して申し訳ないというのでお経をあげる。なんと柱が腐るからといって、シュッシュッやるでしょう。あとで供養をする。こういう社会というのは、かつて日本にあったし、今でもあるんですね。

それから動物供養の中に活魚、生きた魚を扱うところ、お寿司屋さんやなんかでは塚をつくって霊を慰めた。蜜蜂の場合は蜂塚がある。鯨を殺す商売の場合は鯨の霊塔を作って供養をする。大きな鯨、あれは、赤ちゃんは卵じゃないのです。我々と同じように哺乳類ですから人間並みに子どもを可愛がりますね。我々はこの世で生きて行くためには鯨を殺したり、シロアリを殺したりいろんなものを殺さざるを得ない。しかしそのお陰で自分が命長らえているのだから、年に何回かは供養してあげよう。この懇ろなる思いやりの心が日本人にはあった。

これを増長させたのが何だろうというと、私は仏教という宗教の慈悲の精神だと思います。自分を愛おう（いとおう）ものは他人をも愛おい、他人と同じように自分を愛おいなさい、と教えたのはお釈迦様でありましたから、愛おしいのは自分だけではないんだ。相手も自分と同じように愛おしい存在だと。この思想が日本人にこういうことをやらせた。それ以前からあったかもしれませんが仏教がこれを強めたということが言えますね。人間のために命が捧げられたものは人間と同じように供養した。これがすばらしい。

ところが今日の社会ではどうでしょうか。「儲かればいいんだろう」。このごろはいろんなレーダーを使って魚が何処にいるかを確認すると、即座に一網打尽してしまうのですね。それで有り余ったものは肥料やなんかにしているのですが、そのためにニシンをはじめとして絶滅寸前だなどという魚類はたくさんいるわけでしょう？何とかならないかと環境省あたりが今言い出していますよね。要するに人間というのは知恵がありますから、それに任せていろんな道具をつくってこれまでやってきた。その間に「ほどほどに」というところが日本人にはあったのですが、どうもここ数十年の間に「ほどほどにしておこう」ではなくて、徹底的にという気分が我々の心を占めてきたのではないでしょうか。そういう一網打尽的なあり方が今の学校で生徒が生徒を殺すとか、親が子どもを二人も殺すとか、今度は子どもが親を殺して火を放つとか、こういう殺伐とした社会を作る原因の一つになっているのではないか。

Ⅳ　現代社会と「いのち」の感覚

命への感覚が薄れた現代だと私は思います。

「いのち」というのは目に見えないのです。「生命」というのは目に見える。生命というのは漢字で書く生命です。これは脈拍をとったり自分の呼吸を測ったりすると「俺が生きているな」と自覚する生命です。ところが「いのち」の方は「今私が生きているが佐々木のいのちが見えるか」と言われてもみなさん見えないですね、私の「いのち」は。此処にいて背広を着た男が今話をしている、ということですから、生命現象としての佐々木が見えても「いのち」は見えないはずです。

ところがその「いのち」というところに目がいかないで、医学的・物理的佐々木だけを見ていると、憎らしいなんていうことになるとピストルだとか刀で刺し殺したりということになる。ところが「いのち」という見えないものへの畏れがあると「人を殺してはいけない」ということになりますね。その「いのち」というのはいったいなんであろうかということであります。

今の教育界は、文化省をはじめとしていろんな人たちがどうやって非行児を無くそうか、どうやってイジメを無くそうかということで、法規を変えよう、法律を変えようとして一生懸命国会で論戦をやっておりますね。ＮＨＫでも先だって二時間半の番組を見たのですが、その中では「いのち」の深みだとか「いのち」への畏れなどということを言っている文化人はだれもいませんでした。教育委員会の仕組みが悪い、文化省と地方の校長先生との間の流通が上手くいってない。どこの制度をこういうふうにしたら上手くいくだろう。私はもういくら制度をいじっても最後は心の問題が人間の行動を左右すると見ますので、ああいう議論ではなかなか問題解決にならないなと考えます。

ではその「いのち」の深みへ眼差しを注ぐとはどういうことであろうかというと、そこに見

える世界と見えない世界という問題があると思います。「見える世界」と「見えない世界」とは一つだよと仏教では教えておりますが一般の人々にはこれを分けて話した方が解りいいと思います。はっきりいうと「見える世界」というのは私がここで今おしゃべりをし、みなさんが善光寺さんに来てこれから法要に参加する。こういう人たちが「見える世界」です。だれが私をここに立たせたかというと、もういませんが「見えない世界」に行った私の両親が私という「見える世界」をここに存在させている。同じようにみなさんも二百、三百の方々がもうあの世に行って仏さんのところにいる「見えない存在」によって今ここにこうしておられる。こういうふうに説明したらわかると思います。ようするにこのように理屈をこねますと「見える世界」は「見えない世界」によって育まれ支えられている、こういうことになります。だからもっと

我々は「見えない世界」に対する眼を開いていなければいけない。この世界を奪い過ぎると、子どもたちは大変なことになるということはもう実証済みでありますね。

そこでもう一度、「見える世界」は「見えない世界」に支えられているという認識や特に感性について話します。認識ということになると、理屈で「あの先生の話はつじつまがあっていない」とかなんとかいうことで、知の領域だけでみなさん判断する。感性や感情は、理屈はどうかわかんないけど、ジーンときたぞとか、あるいはブルブルっときたとか、皮膚に何かが働いたとかいう感覚、これが宗教には大事なのです。教育でもそこが大事なんです。だから子どもにはあまり説教するよりはむしろ「ご飯を食べるとき手を合わせて食べましょう」だけでもよろしいと思います。それは見えないものに対する畏れの感覚を知らず知らずのうちに養っている

ということです。

そこでその見えないものはどう感覚したらいいかということをお話します。サラスワテイ川についてです。「サラスワテイ」というのは実際には無い川だけれどもあるのです。無い川だけれどもあるというのは逆説でありまして、信仰上の川であり精神世界の中にある川です。インド人の精神の中にはサラスワテイ川がちゃんと流れている。それをインド人でない我々が見ようとすると見えない。こういうことです。

インドの地図を想像してください。逆三角形で下にはスリランカという島が右側にありますね。その逆三角形の上の方、底辺の方の西の方、左側の方にニューデリーという首府があります。そのニューデリーのあたりウッタール・プラデシュ州といいますが、そのあたりにアラハバードという都市があります。そのアラハバードはインド十億の民が一生に一度その川に行って湯浴みをしたい、沐浴したいと願う憧れの地なのです。どうしてか。ガンジス川というインドの農業を支えている川とヤムナー川という二つの川が合流してガンジスになる。二つとも永遠の大山脈ヒマラヤの雪が溶けて地下水となって流れてくる。だからヒマラヤのあの清浄なる八千メートル級の山々もインド人にとっては「見えない世界」ですが、その清浄の姿をとって現れた、神々として拝んでいる。ガンジス川もヤムナー川もそういう山々の雪が解けた水が流れていますから「聖なる川」なんですね。その聖なる川は見れば見えるのです。二本の大きな川が来て合流するのです。

ところがそこにもう一本インド人は「サラスワテイという川がながれている」と信じています。そこでそこに日本人やアメリカ人がツアーで行くでしょう。そうするとそこで十人ぐらいを舟に乗せてインド人がギーコラギーコラ漕ぎ、

そこの川の辺りを回って説明をするわけです。「ガンジス川が右の方、左の方からヤムナー川ですが、もう一つ信仰上のサラスワテイという川が流れているんです。サラスワテイという川があるからこそ、ガンジスもヤムナーも聖なる川なんです」と言ったら、アメリカ人の旅行客が「船頭さん嘘をつくなよ。川が右、左で二本だけだろ。サラスワテイなんてどこにも見えないよ」。これに対してインド人の船頭がこう言いました。

「あなたには風がみえるかい？　風は吹いているんだけれども、風というのは目に見えない。ちょうど我々が心を見ようとして心臓は見えても心はみえない。同じように見えなくても現に我々の肌にそよ風、冷たい風となって外から影響しているじゃないか。サラスワテイ川は私たちの心の中に流れている。つまり信仰上の川なんだ。私はそのサラスワテイという見えない川の存在を全身で、体中で感じています」と。いかにもサラスワテイを信じているインド人船頭ならではの言葉ではありませんか。

さて、サラスワテイは日本ではベンサイテンと訳します。雄弁の「弁」と才能の「才」、天は天体の「天」、神様です。弁才天というのは江の島が非常に有名ですね。それから竹生島弁才天、厳島弁才天。この三つを三大弁才天といって有名なのです。「遠く霞むは彦根城　波に暮れゆく竹生島」と竹生島というのが琵琶湖にありますね。それから厳島の平家納経で有名な弁才天がある。御神体は裸体の美女です。ふくよかな姿で琵琶をかき抱いている。なかなか実像を拝むことができないんですが、いつか江の島のものが細工をするときに写真がでたことがあります。これは川の神であり、水の神なんです。その神が後になると学問の神、音楽の神、芸術の神になります。そうするとあらゆるものの根源が、水であるということなのですね。さきに太陽を

拝まないと五穀がとれないから日願といって、お日様に願いをかけたと言いました。太陽の他にもうひとつ農耕の条件は水が無いとダメなのです。砂漠を見てください。何も生えていない。そこで水と太陽が神であるわけです。この弁才天は水と川の神であり、日本でも水の神としても拝まれ、さらに芸術・学問の神としても拝まれているのです。

V　見えないものへの眼差しを

ここでインド人は見えない物を「風」に例えている。横浜港にボートかなんかでいきますと、女性の髪をなびかせるような風がくる。見えませんよ、風は。風は何かの現象の結果から反芻してはじめて解る。同じようなものが死者でありまして、昔の人は「丑三つ時に死者は風のようにあらわれた」という。丑三つ時というのは朝でもない、夜でもない、その境目ですね。「境目の時に仏はほのかな姿をあらわしたもう」という歌が古い文献に出てくるのです。だから丑三つ時には幽霊や仏様が出てくる。確かに声を聞かせるのです。だから「幽」というのは「かすか」とも読ませますよね。そんなことで風というのは日本だけでも中国だけでもない地球全体の呼吸みたいなものです。それが風です。地球の呼吸みたいなもの。それと太陽無くして人間の文明は無いんですね。

最後に現代社会の教育界が今困っているという話ですが、偉い教育学者がいくらいろんなことを言ってもどうしようもないわけで、家庭においても小さい時からできれば仏教行事へ子どもたちを参加させたらどうだろう。こういうところに二歳か三歳の子どもを連れてくる。こういうところに来ますとね、雰囲気が全然違う。なぜ雰囲気が家庭と違うか、ここは「彼岸」を

あらわしているから違うわけです。ご家庭の中は「此岸」でありますから、そこから「彼岸」に連れ込むと、子どもたちは最初驚くかもしれませんが、ここで行われている法要は一生彼・彼女の心の奥底に刻印されて消えないはずです。

それが「見えない存在」に対して眼を開かせる大きな方法というか方便になるのです。ということをここで強調したいと思うのです。「いのち」への畏れの感性は宗教儀礼への参加によって培われます。子どもたちに亡き人、仏さんに花をお供えし手を合わせる習俗を、こういういい習慣を伝えようじゃないかというのがここでのミソであります。私どもは「元気だ、元気だ」といってもやがて必ず元気な人も年老いてあの世にいきます。私のように七十を過ぎますと、死亡記事が非常に気になるんですね。大学でお世話になっていた同僚だとか先輩が亡くなる、七十何歳。「私はまだ助かっているんだなぁ」と思うのでありますが、そこでの思いが複雑でありまして先に逝った人、気の毒だなぁと思うのと同時に私はまだ大丈夫だなぁとへんな自信にもなっている。それは危険ですよね。そこで良寛和尚はなんて言ったかというと、今のような私のあさましいというか、みんな友達はあの世に行ったけど俺は残ってるぞというようなことへの警告として良寛さんは詠を残しました。この人は曹洞宗のお坊さんです。何と詠ったか。

「散る桜残る桜も散る桜」。桜はハラハラハラと散っていく。あの潔さを日本人は好きなんですね。いつまでもしがみついてボタッと落ちるよりも、風が来ると風に逆らわないでパァーッと散っていく、あの潔いいなせな姿に日本人というのは桜に狂いますよね。ところがその中でも最後まで残るものがあるのです、風が吹いても散らない。「三日見ぬ間の桜かな」また「夜半に嵐の吹かぬものかは」。明日かあさって見れる

よといっていたら、夜半に嵐が吹いて散る。あの桜前線のころ嵐が来るんですよ。これがまた日本人好みです。いいなぁと思ったところに不幸や望ましくないことがやってくるという状況を日本人は芸術的・宗教的につかまえました。

この「散る桜残る桜も散る桜」。先に散った方々を残る桜、残る人間が供養してあげなくてはいけないし、逝った人々を残ったものが供養していく。この供養供養の連続で人類は存続していく。この後のご法要でみなさん「彼岸」を充分に感じとっていただきたいということを申し上げて私のお話を終ります。ありがとうございます。

因揭陀尊者

秋彼岸法要法話

まごころに生きる

曹洞宗特派布教師
泉区 東泉寺住職 関水俊道老師

秋とも思えない残暑が続く九月二十一日、善光寺では午前・午後の二回にわたって、秋の彼岸法要が行われました。法要が行われた釈迦殿には各回約三百名の檀信徒の皆様が熱心にお詣りされていました。毎回、日々の暮らしの糧になると好評の御法話は、曹洞宗特派布教師東泉寺住職・関水俊道老師にお願いしました。

みなさんこんにちは。

本当にお暑うございます。「暑さ寒さも彼岸まで」といいますが、最近そのことわざが通用しなくなり、暑さだけは一年中というように、暑い毎日となってきています。本日も彼岸の二日目とはいえ、この日和で暑い中でありますが、しばらくの間、仏様のお話をさせていただきます。どうぞ、お楽な気持ちでお聞き下さればありがたいと思います。

本日は、「まごころに生きる」というテーマで、お彼岸にちなんだお話をさせていただき思います。

お彼岸というのは、みなさんがこうしてお墓参り、そしてお寺様にお参りに出られます。仏様の方へ足を出向かせてお参りするという、こういう一週間でございます。そのちょっと前にお盆がありますが、お盆というのは逆に、迎え火を焚いて仏様に来ていただき、送り火でお送りするという行事でございます。地域によっては、迎え火を焚く時にお墓参りをして、そして仏様をお連れするという習慣の地域もあります。いろいろ風習は違いますが、一般的には、お盆の行事というのは仏様に来ていただくという行事で、お彼岸というのは、逆に、こちらから向こうの岸に行く、という行事です。

「彼岸」というのは「彼方（かなた）の岸」。彼方の岸に、こちらから出向いて行くという意味合いがあって、お墓参りをすると同時に、その彼方の岸のところに目を向けるという、大変重要なお参りがお彼岸というものでございます。

さてそこで、お盆の時に思うのですが、「棚経」といって精霊棚（しょうりょうだな）を設けてそこに仏様をお招きして、そこに菩提寺のお坊さんに来てもらってお参りをしてもらう風習があるわけですが、現在ではなかなか一軒一軒にお参りするということができなくなりました。私は横浜市の泉区とい

うところで、横浜西南部の外れの下飯田という地区の寺に住んでいます。私の住む寺の周辺はまだ旧農家の方々のお家がいっぱいあります。夏の棚経のお参りにも行くのですが、だんだん留守になる家庭が増えています。昔は、その期間はいつ行ってもお家の方がいらっしゃいました。今は、お勤めされることが多くて、「お坊さん、いつ来られますか」「和尚さん、何時に来られますか」と聞かれるのですが、なかなか正確に言えません。交通の渋滞、いろいろな都合があって、一時間もずれると「どうしましたか!?」ということになってくる。それはこの時代の流れなのですけれど…。招いた仏様もそのように扱われているのかな?（笑）。分からないですけれど、招いた仏様も、せっかく戻って来られたのに、今日はお買い物だから留守になっていたり、あるいは旅行やお仕事でお出掛けしちゃったり…。ですから、そういうことを考えると、仏に出会う…仏様と会話するということは、ある程度、現代の生活の所に仏様に来ていただくというよりは、その期間は、仏様の生活ともうしましょうか、仏様の心境というのでしょうか、その立場になってお参りすることが大事なのではないかと特に感じています。

仏様は、どうして「ほとけさま」というのかというと、語源はいろいろあるのですが、日本語の「ほとけ」には「ほどける」という意味があるようです。迷いやいろいろな欲望とか、そういうものに縛られて毎日生きていますが、そういうものから、死が来ると「ほどける」んですね。解放されるということで、「ほどけ」、「ほとけさま」になったというのが日本語的な解釈です。「仏（ぶつ）」と書く仏様は、お釈迦様のお悟りの境地を「仏陀（ぶっだ）」と呼び、お釈迦様のお悟りの境地を表している「仏」でございます。

その仏様になられたご先祖様をお迎えするわ

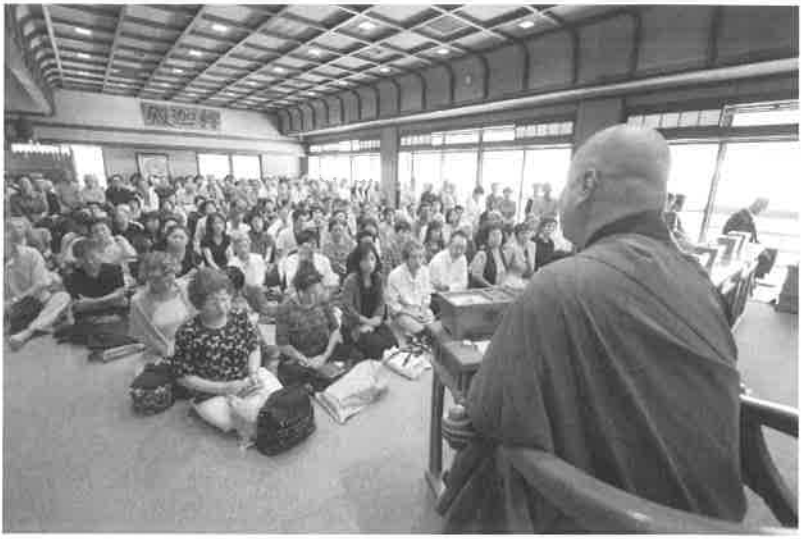
けですから、やはりお迎えする時もそれなりの対応を持ってお迎えするというのが本来のお盆のお参りの姿です。

本日のお彼岸は、そのお悟りの境地のところにお参りに行く時の心境が大事なのです。この私たちの縛られた娑婆世界といいましょうか、いろいろな出来事がある中でそのままの気持ちでお墓参りをするとしましょう。そうすると、仏様たちも「大変だねえ」「大変だけどよく来たねえ」「まあ、ゆっくりして行きなさい」とかいうことを、仏様は言ってくれるかもしれませんね。そして、お彼岸のお参りをされた時には、その違いに気づき、安らぎの気持ちと共に仏様の境地に少し近づいて、登って行くことができるわけです。

私たちの世界と仏の世界とは隔たりがあります。こちら（此岸）から仏の世界（彼岸）には差があります。死とともに彼岸に到達するとしても、現時点では隔たりがあります。この悩み多き人生の現在に、死を迎える前に、少し仏様の境地（彼岸）に近づいてお参りをする、これがお彼岸の大事なところです。

仏様の心境になって出会う。仏様から降りてきてもらって、私たち迷いの世界で出会うのでは、どうも仏様に申訳ない。やはり仏様の心境になって、そして、その生き方として、お会いして、お参りする。「まごころに生きる」という生き方は、そういう仏様の心に生きることなのだと考えます。

今、こちらの私たちの世界について考えますと、不安なところに目が行ってしまいます。政治の世界もそうですし、環境の問題もそうです。今年は日本に来る外国の観光客が、減ったんだそうですね。なぜ減ったのかと理由を聞きましたら、新潟柏崎の原子力発電所が地震のため火災になり、煙が出ている様子が、映像で世界に



同時に発信されました。それを見て「日本は放射能で汚染されている」と解釈されたらしいのです。当の日本の方が鈍感です。世界は情報でつながっていますし、地震の問題にしても環境の問題にしても本当に心配なことです。明日何があるかわからない。その時に、私たちはどうしていったらいいのか。こう考えたとき、仏様の心境として毎日を暮らして行くという中に、心の安心があることに気づきます。

とかく私達は目先のことに捕われてしまって、仏様のあの世の世界のことに、ちょっと心が行かなくなってしまいます。これが、一番もったいないことなのです。目先の利益、現実的な問題はなかなか根が深いのです。本日もこの会場は大変涼しくなっていますけど、冷房をするということも、必要以上にムダな電力を使うことによって、環境的には大変なことになっていくわけです。有効に使うということで、次の世代

の生活に生かされるのですが、目先のことだけを考えると本当にもったいない現状が迫っているわけです。

「こそあど言葉」という国語で使う言葉があります。「こ・そ・あ・ど」というのは近い順番に言っている指示語なのです。「こ」というのは、この辺、この人、こちら側、というように近くを指す言葉。次は「そ」、その辺とか、そちらの人とか、その考えとかという距離を指す言葉。その次に「あ」。あの辺とかあの人、あのこと、などの距離が「あ」。「あの世」もそうです。「こそあど」の「あ」なのです。それで、「あ」の辺のことになると、関心が薄まり、先ずは現実的な「こ」の問題、自分の身の回りのことだけに関心が集まり、優先されてしまうのです。本当はあの世（ほとけの境地）も大事なんですね。あの世も、すぐこの世になってつながっているのです。

この「あ」の次はどこに行くかというと、「ど」なのですね。「こそあど」の「ど」。「ど」というのは、何処？とか、どの人とか、どの辺とか、見えない遠くのところが「ど」です。その辺をどうすればいいのか。見えない所も実は大事なんですね。先ほどの、ご先祖様とのお盆や彼岸での会話、これも見えない世界です。見えない方、亡くなった方をどうしているのか。これもやはり「ど」の問題です。彼岸法要なども、まさに、「見えない世界のところに心を合わせて、ご冥福をお祈りする」。そして、あの世で一緒にお世話になっている見知らぬ大勢の方もともどもお参りする。こういう意味があるのです。これは、「あ」とか「ど」の世界。見えない世界のところに心を合わせる、大事な行事なのですね。

最近、有名な曲に「千の風になって」という唄があります。「♪千の風に～」というあの歌です。これは、亡くなった人がお墓に眠ってない

んだ、死んでないんだ…と、そして千の風になって私たちの周りにいるんだ…と。そうか、ありがたいな、うれしいな、という捉え方もあります。これはアメリカの同時多発テロの追悼の場で歌われたということでもありますし、世界各国でかなり評判になっている歌なのです。ああ、亡くなった人もこの辺にいるんだな、ということで勇気づけられる。そして生きる希望を持たされる歌ではあるのです。

ところが、逆の見方もあります。私の寺の檀家さんで、実は悲しい、大変な思いをされたご夫妻がいらっしゃいます。愛娘さんが、大変飛行機が好きで、航空会社に勤められていて、空のことが大好きなので、空からパラシュートで降りるスカイダイビングという企画に参加されました。それが、本当に不幸なことに、事故でパラシュートが開かなくて、インストラクターの方と共々、落下してしまいました。そのご葬儀に私も立ち会いました。その後何年か経って、先日お会いした時に「和尚さん、私たち夫婦は、今流行っている『千の風になって』という歌はとても聞けません。それが掛かるとすぐ消します。お墓に眠ってません、千の風になっている…。じゃあどこにいるんだ、出てきて欲しい。お墓にいないんだったら出てきて欲しい、そういう叶わぬ夢をこの歌を歌っても現実とは違う。現実は戻ってこないんだ」と。あんな歌、悲し

くて聞けない、そういう思いがあるのも理解できます。

本当に現実に直面する、直視するということも「生きる」上では大切なことです。本当に直面し、本当のことを考えた場合には、やはり虚実というか、言葉遊びみたいな感じになってしまいます。そう考えますと「千の風になって」という捉え方は、やはりご夫妻にとっては、悲しい歌です。

実は「千の風になる」ということは、仏教の教えにもあるのです。お釈迦様が亡くなられて荼毘に付された時に、その荼毘の煙を見て、お弟子さんたちは「お釈迦様は、今、あの煙に乗って天に昇ったんだな。そして風になったんだな」という風にお思いになった。そこで、自然に帰ったんだ、ということで「私たちはお釈迦様に代わって、その命を心の命として伝承していこう」と思った訳です。風になっていくということは、それはまさに、先ほどの歌と同じような意味合いなのですが、それは心の魂としてのあり方、そういう意味として捉えるべきなのです。しかし、それがなかなか現実的には本当の命として捉えることができない、というところも真実でございます。

私たちにとって大事なことは、「本当の姿を捉える」、「大事なこと、大切なこととは何なのか」を捉えた時に、その心を「(ほとけの)まごころ」という風に理解することができるのです。

お釈迦様がこの教えに気付かれたのが三十五歳の時。お悟りしたといわれています。お釈迦様は王様の家に生まれまして、そして不自由がない生活だったのですが、「自分が納得する」この世というのは何なのか。そして、病気になったり老化現象が来たり、死が来たりする。それから逃れることは出来ないのか。みんなが仲良く豊かな生活、暮らしをすること、安心する毎

日を暮らすというのはどういうことなのかなと思った時に、もうお城の中でゆっくりしていることはできなかったのでございます。自分として納得することは、外に出て、そして仏様の悟りの境地に至ること。そういうことに目覚めまして、苦行をされたのです。でも本当の安心とは何なのかな、ということはなかなか分かりませんでした。その時に、苦行をしていた村のスジャータさんという娘さんからいただいた、牛乳の入ったお粥を食べて、それで元気が出て悟りを開いたといわれています。

その時、当時のインドの社会ではお坊さんの修行としては動物性のタンパク質を摂るということは、それはルール違反といわれていたのです。でも、お釈迦様はルールとは何なのか、大切なことは何なのか、というように考えて、気がついた時にその施しをありがたく頂いていました。その施しをいただいた上に、自分は何をするべきかという大切なことがあるんだということに気付いて、悟りを開いたと言われています。

でも、さらに尊いことは、悟りを開いてから、その教えを大勢の人に伝えなければいけない、それが自分の役目だという風に思われて、それで八十歳で亡くなられるまで、いろいろなところで教えを説かれました。お釈迦様も生身の人間ですから、お腹もすくでしょう。それから全国を歩くと足も痛いでしょう。夜も眠くなるでしょう。それは私たちと同じです。悲しみもあるでしょう。そういう悲しみやつらさ、苦しさを乗り越えて、自分のお家を持たないで各所を歩きながら説法に歩かれました。これはやはり、お釈迦様なりに放っておけない心があったのだと思うのです。それが「まごころ」。

まごころという字を漢字で書くと、「真の心」ですね。「真心」。この真の心、真心について辞

典を引きますと何と書いてあるかといいますと「飾り気のない、そして嘘のない心」。飾り気がなくて、嘘がない、そのまま。私のまま。でも、そのままでいいのでしょうか…？　嘘がなくて飾り気がなくて…、たとえば、自分の目先の欲望だけに動いている人は嘘がない、そして飾り気がない、そのままでお金儲けをしてしまう。目先の利益にとらわれた飾り気がなくて嘘のない心、これも真心と言えるのでしょうか。辞書の言葉をそのまま使えばそうなってしまいます。

でも、本当の真心というのは、それは、私たちの中にある仏心（ほとけごころ）、私だけの目先の利益だけではなくて、みんなが仲良くできて、そして安心できる仏様の心に立った時の真心。そのことに忠実に生きることが真心に生きることなのです。ですから、先ほどのお嬢様を亡くされたご両親にしてみれば、その真心とは、まず現実に直面する、直視する、やはりそれしかないんだとい

うことを、そのご両親は言ってらっしゃいました。

現実を直視する。そうすると、そこで大事なことが見えて来ます。まさにお釈迦様が気付かれた教えもそうです。本当のことって何なのか。そうだとすれば、これは放っとけない、自分はこうする、しなければいけない、ということを感じたわけでございます。

その真実を「正しく見る」ことを「正見（しょうけん）」とお釈迦様は呼んでおられます。八つの正しい行い（八正道）の第一にあげられています。物事を正しく見ることは難しいことですが、そのことに気づく大きな要素が三つあることをお釈迦さまは教えてくれています。これは全世界に共通の真理なのですが、この真理を手がかりに、正しく物事を見ることによって「仏のまごころ」に生きることができるのです。

その一つは何かというと、「この世の中は常に変化している」。一定の物が、時間が変化して、留まることがないということ。これは全世界共通のものでございます。時間は戻りませんから、どんどん変化します。その瞬間というのはとらえどころがありません。そして、この変化の流れに、誰も逆らうことはできません。これが一番目の手がかりです。これを見つめるということ、見極めるということ。亡くなった人たちは帰らない。そして老化現象は、今、一時一時起こっている。私たち人間は百パーセント死亡率を持っている。それはいつ来るかは分からない問題なだけ。そういったことが、時が動いて行くということです。逆に言うと、良くなることもそうです。ずーっとじっとしていないのです。病気が良くなったり、それから新しい赤ちゃんの命が生まれる。これもその、変化の中です。これを仏教の言葉では「無常」と呼んでいます。無常、常が無い。これに気づくこと。ああ、そ

うなんだな、無常なんだな。世の中は止まることなく動いているんだなと観じることが、第一の正見です。

でも、このことを言いますと、「わかります和尚さん。この無常っていうのは、本当に、一時って誰も止められません。大切な時間で大事だっていうことがわかります」と言いながら、それが分かっていない行動が多い訳ですね。だからいろいろな事件や犯罪が世の中で絶え間なく起きているのです。「本当にこの無常ということが分かっていればどうなるか」ということを、永平寺を開かれました道元禅師様はこのように教えてくれています。

「誠にそれ無常を感ずる時、吾我の心起こらず、名利の念生ぜず、時光の甚だ速やかなることを恐怖す。ゆえに行道は、頭燃を救う」

こういう言葉が『学道用心集』という書物の中に書かれております。易しく言いますと「無常を感ずる」ということ、本当に無常を分かるという時には、吾我という、俺だとか我だとかいう自己中心的な「吾我」の心は起こらないはずであり、また、「名利」という名声とか利益に心は動かないはずだというのです。これが起きるということは、本当に無常を感じていないということです。本当にこの一時が虚しいものだな、と感じた時には、俺がとか自分がとかはどうでもいいと、みんな同じなんだ、その無常をみんな同じように生きているのだから、今さら私が何を…と。そう考えれば、名前とか利益とかそういうことよりも大事なことがあるということに気付くということ。それが道元禅師のするどい指摘であります。

時光というのは「時間と光」で、時の流れの速いことに「恐怖」すると続いています。恐怖とは、驚いて恐れおののくこと。「ゆえに行道は頭燃を救う」というのは、…だからこそ行道（ほ

とけさまとしての行いの道）というのは、頭の毛が今燃えているという火の粉を払うことなのだということです。「えっ、頭の毛、燃えてません」と思うでしょうけど、「今、時がどんどん過ぎているということは、頭の毛一本一本が燃えてることだよ」ということなのです。

つまり、本当に無常を感ずれば、自己中心的な目先のことにとらわれないで、大事なことって、もっとあるんだなーということに気付くというのです。これが一番目。いかがでしょうか。

そして二番目の正見。真理を知ることの手がかりの次は、「自分の物って何にもない」と気がつくことです。自分の物って何にもないんです。自分のものって何か「これ自分の物だと思う」ってありますか。自分の物って何にもないんです。お金も自分のものではないのです。契約で、たまたま使わせてもらっているもの。自分の命だってそうです。お家もそうですし、この地球自体も。

実体がない。これを仏教の言葉で何ていうかというと「無我」といいます。我が無い。「我」というのは実体という意味なんです。実体がない。『般若心経』では「空」と呼んでいます。実は『般若心経』というのはお彼岸のお経でございます。彼方なる向こうの岸の、悟りの境地に至るための智慧、これを般若と呼んでいます。そこに書いてある教えは、この世の出来事というのは、全部「空」であって、実体がなくとらえどころがない。たまたま今、ここにある私と皆様との出会いというのも、縁と縁というつながりで結ばれて、そこにあるので、このつながりが切れればなくなる。ですから実体としては何にもないんだと。決まったことは何にもないんだという、これが二番目の「無我」という視点です。

そうすると、どういう風に考えることができ

るかというと、「あの人は良い人なんだ、悪い人なんだ」というのは、実体として最初からオギャアと良い人、悪い人の区別があって生まれてこないということです。ですからそれを「無我」といいます。たとえ、財政破綻をして自己破産をしなければいけないとか、いろいろなことがあると絶望して、もうダメだ、もう私は生きて行けないと思いがちですが、その「生きて行けない」というのは、もともと「生きる」という実体も無いのですから、最初からもともと無いのです。だから、また条件が変化することによってどうにでもなっていく。

無限の可能性を持っているのが、「空」であり「無我」です。ですから、「幸運をおごらず、絶望も嘆かず」、宝くじが当たったり良いことが連続して起こる時にも、奢りの心を持たないで、また逆にどんな逆境の時にもめげない心。これが無我が教えてくれる、正しい見解、「正見」の二番目の指針です。

三番目の教えは何かと言うと、「皆苦」です。みんな苦しい？　いや、苦しくないよ、楽しいこともいっぱいあるよ、と言いたいですよね。でも、この「苦」というのは自由にならないということです。すべてが自分のものではないのですから自由になりません。命もそうですし、人の心も自由に動かすことができません。自分の思い通りにならない。だからこそ、これを「苦」と名付けているのです。この視点に立てば、もともと苦から始まり苦に終わる人生、「楽しむ」ということは何なのか、見えてくるのではないでしょうか。

以上の三つの視点で、正しく世の中というもの、この現実の真理の姿を理解することが仏様の心、「真心（まごころ）」であります。その心に登って、そして仏様にお会いする。

このお彼岸という週間は、このような正しい

見方、本当の真実というものを見つめて仏と出会う場であります。吾我の心が起こらない、みんなの幸せを感じること。お釈迦様はその悟りに気付いたときに、みんなにこのことを教えなければダメなんだと感じ、八十歳で亡くなられるまで、この施しの行を続けられました。これがお釈迦様のまごころであります。

お彼岸とはまさにそのような心でお参りしていただきまして、仏様と出会っていただく機会なのです。

仏様という言葉には三つの仏様がふくまれています。一つは亡くなったご先祖様のこと。二つ目は、その教えを伝えていただいたお釈迦様など先輩の仏様。そして、三つ目の仏様は、正しい仏の智慧を持つことによって、お釈迦様や亡くなったご先祖様と共に、同じ仏の境地として出会う可能性を秘めた、私たち一人ひとりに内在している仏様であります。そして、その帰する所は一つです。「仏心」。わたしの心も亡くなった人も、それからお釈迦様の心も、一つに帰って行くわけです。先ほどのお釈迦様のまごころを考えますと、ほんとうにありがたいことだな、と思います。是非、そのような安らかなお心でお参り頂きますようご祈念いたします。

以上、駆け足で「まごころに生きる」についてのお話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

五世紀 菩薩像
中國 敦煌 二七五窟

【転載】

博志方丈の「人同じからず」と題する随筆が、冊子「生きる力」（曹洞宗　神奈川県第二宗務所　第五教区出版委員会・刊）に掲載されました。ここにご紹介いたします。

人同じからず

善光寺　黒田博志

師父大圓和尚が亡くなり、早いもので昨年末には、三回忌を迎え無事尽くすことができました。この二年間唯々刻々夢中に走って参りました。以来、教区のご寺院様、檀信徒のみなさまのお陰で、唯今をつつがなく迎えられていることに、深く深く感謝あるのみでございます。

山内では、この春もまた変わりなく、梅が咲き、桜が開き、杏も桃も牡丹まで時期を迎え、花々はこぞってみごとに咲き乱れています。

この季節は殊の外、師父を想い出します。或る時、師父は桜をめでながら、「くる年くる年、花は同じように咲く、しかし人というのは、年ごとに変わって同じではない。同じであってはいけないのだ。人は歳々進歩発展がなければ、生れた甲斐がないというものだ。博志わかるか」。

私は師父の恩愛になれて、大事を大事と思わず、大事を怠っておりました。私はいま求めて苦労の中にあります。道を学ぼうと志すとき、私の心の中、その道に師父が現われて参ります。私は大いなるものに守られて導かれていることを実感する。『年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず』。師父のことば一つ一つが、いま、わたくしに、かぎりなく力を与え、かぎりなくひかりを与えてくれます。

師父はまた、『人間万事塞翁が馬』という語を

座右の銘としておりました。人の禍福は無常。禍福は変転し、すべてそこに留まっていない。禍の時はじーっと耐え、精進努力していると、必ず福が訪れる。またうまくいったからと浮かれていては、いつの間にか災難や困難がやってくる。大事なことは、人間盛時には驕らず、衰時には悲しむことがないよう心掛けることであり、唯々常日頃、仏道を深く信じることこそが、安心立命への道だと、くり返し申しておりました。いまでも耳に聞こえます。

住職という位置に立っても二年位ではいっこうに未熟。若輩が先に立ちます。いまは唯々「三年父の道、改むるなきは孝というべし」。当分父の道のあとを踏みながら、出来ることをやって参りたいと覚悟を新たにいたしております。

在りし日の大圓和尚、家族と共に

夫人と共に

参禅会・写経会のお知らせ

参禅会

善光寺では毎月一回、日曜日の早朝に参禅会を行っています。

坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方のご参加もお待ちしています。お気軽にご参加ください。

平成20年
1月6日(日)
※2月11日(月)
3月2日(日)
4月6日(日)
5月4日(日)
6月8日(日)
7月6日(日)
8月3日(日)
9月7日(日)
10月5日(日)
11月2日(日)
12月7日(日)

場所：善光寺　釈迦殿

日程：原則として毎月第1日曜日（寺の行事によって変更する場合があります）

時間：午前5時45分　集合・準備
午前6時より　坐禅・朝課・朝食(お粥)
午前7時45分　解散

費用：無料

服装：ゆったりとしたもの。靴下は履きません。時計やアクセサリーは、はずしてください。

※参禅ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】毎月二十八日（六月・十二月は休み）
午後二時より約一時間半

【場所】善光寺不動殿

【読経】「般若心経」を全員で看読

【写経】引き続きお写経「般若心経」

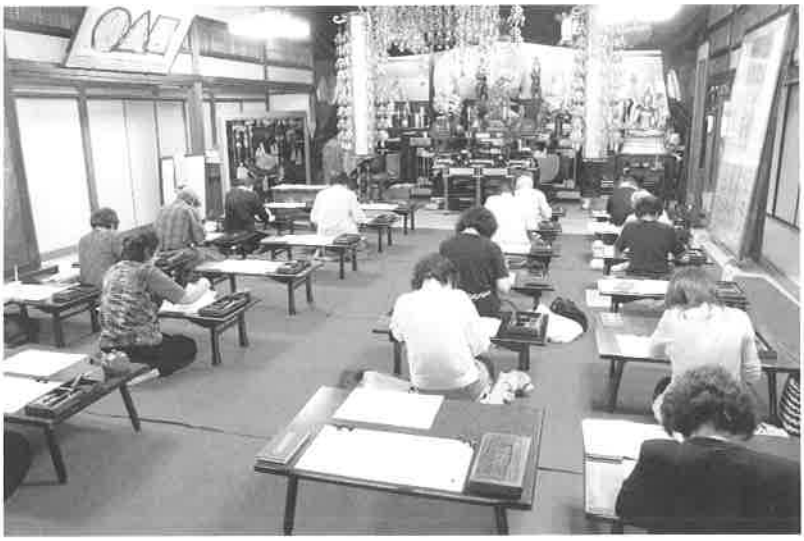
【費用】無料

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙など一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。

参禅会・写経会ともに連絡：

善光寺　横浜市港南区日野中央一―十二―九
（〒二三四―〇〇五三）
電話：〇四五―八四五―一三七一
ファックス：〇四五―八四六―二〇〇〇
Eメール：info @ zenkouji. net
URL：http: // zenkouji. net



善光寺霊園ニュース

開創三十周年の誓願として平成十一年にやすらぎの郷霊園が生まれ、また善光寺より近距離の霊園として平成十八年にひばりの森霊園が誕生しました。大勢の方々のおかげを持ちまして発展、運営をさせて頂いているこの二か所の霊園の近況をお知らせ致します。

横浜やすらぎの郷霊園

花まつり

やすらぎの郷では、お釈迦さまのお誕生日を祝い、初めて「花まつり」を行いました。この霊園は宗旨・宗派を問わない霊園ですが、ご利用いただいている方の大半は仏教徒の方々です。宗教離れが叫ばれる昨今、意識する、しないを別としてやはり日本の仏教的な風土（文化）は、今も引き継がれております。

四月八日（日）とその前日管理事務所の前に花御堂と甘茶を準備、当日は春らしい天候に恵まれ、お墓参りの方々は足を止め、甘茶を注ぎ、手を合わせ、甘茶を味わっていただきました。

「昔を思い出すなぁ。あの頃は甘いものがなくて、本当においしかったのよ」と懐かしがる年配の方や、「子供のころ幼稚園でいただきました」とおっしゃる若い方々もいてそれぞれの世代、それぞれの感覚でお参りいただきました。

どうぞ来年もお参りください。

防犯カメラ設置のお知らせ

昨今、「なぜ?」と首をかしげたくなる事件が多く報道されます。霊園も例外ではありません。

香炉や花立などのステンレス泥棒、墓石に対するいたずら、ひと昔前では考えられない、畏れを感じない、心ない人たちによる事件に対して、安全と管理対策上、園内に四か所防犯カメラを設置致しました。

広い園内を二十四時間すべて監視するわけには参りませんが、皆さまに少しでもご安心いただけるようにさせて頂いております。

新区画開放・永代供養墓

大変、好評につき旧来の区画がなくなった為、ご要望も多く、新区画を開放させて頂く事となりました。

駐車場からすぐの平坦な区域と、富士山を見渡す高台の区域に空き区画がございます。また、お墓の継承の件でお悩みの方には永代供養墓がございます。

大きな御影石のモニュメントにたくさんのお花が飾られ、お線香の煙が絶えず漂う中、皆さまでお参りしていただくこの永代供養墓も五年の月日を数えました。

お近くの方や墓地をお探しの方、お墓の継承の件でお悩みの方などお気軽にご相談下さい。

港南ひばりの森霊園

陽当たりのいい明るい霊園

晴れた日には富士山の眺めも清々しい「港南ひばりの森霊園」。善光寺や横浜市営日野公園墓地に隣接し、平成十八年五月の開園から順調に分譲が進んでいます。

とりわけ南向きの傾斜から生まれる陽当たり、目前に開ける眺望、そして、緑のなかを抜ける爽やかな風は永久の癒やしにふさわしい霊園ともいえるでしょう。

各区画とも、現在、好評販売中です。墓地をお探しの方はお気軽にご相談下さい。

〔目的〕

佛教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1．Zen Center of Los Angeles（ＬＡ禅センター）
“923 S.Normandy Ave., LA., CA90006 U.S.A”
2．Zen Mountain Center of New York（ＮＹ禅センター）
“Box 197,Mt.Tramper,NY 12547 U.S.A”
3．Zen -Zentrum Eisenbuch（アイゼンバッハ・禅センター）
“Eisenbuch 7 D-84567 Erlbach Deutchland Germany”
4．Wat Paknam（ワットパクナム）
“Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand”
5．理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成21年４月より１年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1．論文（次項による）
○論題
①これからの国際興隆と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
いずれか一題を選ぶこと　400字詰原稿用紙５枚以上（Ａ４版タテ書き）
2．保証人と連署した願書　3．卒業証明書
4．履歴書　5．推薦書　6．健康診断書

〔募集人数〕

平成21年度若干名
平成20年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成21年１月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒234-0053　横浜市港南区日野中央１丁目12番９号
TEL.045-845-1371　FAX.045-846-2000

第22回生

横浜善光寺留学僧募集

平成21年度・2009

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA

育英会寄付者

■平成18年度

滝沢　孝子殿
戸澤　洋太殿
黒河内貞子殿
南　有里殿
富田　繁殿
貞　昌　院殿
大野　正殿
増山　静江殿
蓮池　泰乗殿
池田　耕三殿

〈成寿賛助〉

■平成18年度

内山　款偉殿

いつもご寄付賜りありがとうございます。

タイ国の僧侶が来山

去る七月二十六日(木)、タイ国のワットパクナム寺院より副住職様を含む三名の僧侶のご参拝を頂きました。

先代住職への報恩供養のお経の後、先代住職と同じようにワットパクナムで修行をした博志住職や真野老師(育英生)を交え、懐かしい歓談の一時を過ごされました。

ニュース・アラカルト

少林寺拳法坐禅会

去る九月二日(日)恒例の横浜栄光道院(よこはまえいこうどういん)少林寺拳法(しょうりんじけんぽう)の坐禅会が行われました。

早朝から集まった大勢の子どもや保護者、関係者の方々は朝六時の止鐘(坐禅のはじまりの合図の鐘)から約四十分の坐禅を行いました。静寂の中、小学校低学年の子ども達も、頑張って参禅。坐禅の後は声を高らかに読経、唱和、のち、車座になって住職と夏休みの思い出などを語らいながら楽しいひとときをもつ。その後作務として境内の清掃を行いました。

この少林寺拳法の坐禅会は先代住職のころより三十五年以上続いている坐禅会です。現在は春と秋の二回行っていますが、毎回幼い子達が足の痛さや眠たさを我慢して本当に頑張っている姿に励まされます。

戸澤 洋太氏　得度式

去る九月二十八日（金）午後二時、戸澤洋太氏の得度式が、総代をはじめ関係者列席のもと、釈迦殿において執り行われました。戸澤氏はお寺出身ではない二十八歳の青年です。善光寺の早朝坐禅会に参加し、より深く仏教を学びたいと発心して、今年の二月からは毎朝早くより寺に来て、住職と共に朝のお勤めをしています。この度、博志住職の弟子として正式に認められ、得度の儀式を執り行われました。

式に先立ち成願寺山口老師より仏縁を結ぶ意味について、お話を頂き、住職より菩薩戒を授かり、お袈裟が手渡されました。

戸澤氏は「僧侶としての出発点となるこの得度の意味合いを深く心に刻み、感動に震えました」と緊張した面持ちで新しい人生のスタート

に臨む決意と感謝の意を語っていました。

大圓和尚は、三十名を超える多くの弟子に恵まれ、仏縁を広げてまいりました。博志住職も戸澤氏とのご縁により、三十一歳の若さながら初めて弟子を載いたことになります。

「私は、若輩ではありますが、共に精進していきたい」と挨拶。住職の表情も自信に充ちて高揚しておりました。

列席されたご両親におかれましても終生忘れることの出来ない日になられた事と存じます。戸澤氏は来春より金沢の大乗寺、東隆眞ご老師のもと本格的修行にとりくむ予定です。更なる精進を期待します。

ニュース・アラカルト

さつま芋掘り

さつま芋掘りを行いました。

台風一過の好天に恵まれた午後のひと時、十月二十八日（日）やすらぎの郷霊園内の高台にある緑地を耕した畑で、芋掘りを行いました。約一時間、住職はじめ希望者十数名にて、汗と泥にまみれ、ツルを引っ張り、「イモホレワンワン」。

この畑はやすらぎの郷霊園の有志によるもので、昨年より耕作を始めたばかり。

まだ整備されていない状態ですが、皆、楽しんで時間のある時に草むしりをしたり肥料をやったりして苗の成長を見守り、その収穫の楽しみを味わっています。

野菜づくり、園芸に興味のある方はぜひご参加ください。

ニュース・アラカルト

頂相（ちんぞう）のご寄贈

書家、胡建明師（文学博士）より当寺二世中興大圓武志大和尚の頂相（禅僧の肖像画。法統上では、非常に重要なもの）二幅が寄贈されました。

一幅は、本寺光真寺住職・黒田俊雄老師、さらに一幅は、大乗寺山主・東隆眞老師より真讃の添え書きを賜り、現在軸装中です。

来春開山忌に相合わせ、開眼法要をもって完成の運びの予定です。

ニュース・アラカルト

さまざまな山内行事を行いました

四季折々、例年通り五回の一斉大法要。

家内安全を祈って新年祈祷会（1／9）、胡建明師（第十一回善光寺育英生）による法話。余興には、運試しとして大福引会。さらに、中国二胡による甘建民先生の演奏。聞き入って大喝采。

厄除・除災祈祷節分追儺法会（2／3）、赤鬼・青鬼豆蒔かれて退散。余興に咄家三遊亭王楽。林家ひろ木。ご両人に一席ずつ、爆笑のひとと

き。

つくしあうこころを求む彼岸花。春彼岸法会（3／19）・ご法話は駒沢大学名誉教授佐々木宏幹先生、盂蘭盆施食法会（6／29・30）・ご法話は関東管区主監西田正法老師、秋彼岸菩提の種を蒔く日かな、秋彼岸法会（9／21）・ご法話は曹洞宗特派布教師関水俊道老師。各々ご老師にありがたいご法話を頂きました。

いずれの法会も天候に恵まれ、境内はまことに満杯のご参詣者に溢れました。

二胡奏者・甘建民先生

ニュース・アラカルト

新年祈祷会

節分追儺法要

ニュース・アラカルト

三遊亭王楽さん

あまりにも早すぎた…

愛知県
妙厳寺住職　福山諦法老師

常日頃は貴誌『成寿』を御恵送たまわり厚く御礼申し上げます。

それにつけましても御先代様のあまりにも早い御遷化には驚きました。ただただご冥福をお祈り申し上げます。

尽きない思い出

愛知県
宝泉寺住職　江川辰三老師

成寿送付下され、有難く拝読、武志大和尚のご遺徳に敬意を表します。十二月十三日三回忌との由、献香させて戴きます（自坊にて）。

私、平成八年より五年間、總持寺再安居致し、武志方丈の特別なご親交を戴き、共にアメリカ、スイス、同行させて戴き、思い出は尽きません。

活動にいつも感銘

長野県
廣澤寺住職
小笠原隆元老師

『成寿』第三十七巻拝受し深謝申し上げます。善光寺の諸活動にはいつも感銘を受けております。愚生も去る十一

月二十三～四日とアイゼンブッフの普門寺へ行ってきました。

気宇壮大な想念を

横浜市　佐々木宏幹様

『成寿』二〇〇六年冬季号を拝受いたしました。先代中興大圓武志大和尚周忌法要特集号を拝読し、改めて故老師の器量の大きさを感じております。

法嗣の博志方丈さんには、お師匠さんの「草鞋萬里　海内開縁　大志無盡　成寿厳然」という気宇壮大な想念を継承され、善光寺のますますの発展のために、ひいては世界平和のためにご精進あられますように祈念いたします。

三回忌に感慨無量

埼玉県　地福寺住職　鎌田良昭老師

貴山二世中興大圓武志大和尚が御遷化されて早や三回忌を迎えられ、感慨無量なるものがあります。想えば小生が故大和尚とお会いしたのはタイのワットパクナムで修行の最中でした。当時小生は全佛国際部に在籍しWFB本部のあったバンコクへ何回となく派遣されていた頃で、大和尚のお父上白純老大和尚が事務総長の頃でしたので大変可愛がられておりました。本当にもったいない極みと思っております。

今後もご縁を大切に

石川県　大乗寺　石黒玄章宗師

成寿を拝読させていただきました。小生の事まで恐縮です。東隆眞ご老師が帰山すると開口一番「博志さんは立派になってきた」との一言でした。成寿を見ておりますと貴兄のご活躍ぶりに、小生も頭が下がります。今後ともこの

ご縁を大切に小生も努力して参ります。

心より感謝

福蔵寺住職　菊池泰進老師　青森県

例年にない酷暑の夏でした。奥様はじめ山内の皆々様もお元気の事と拝察いたします。

毎朝、先代善光寺方丈様の遺影に手を合わせております。本当に私が今あるのは、先代方丈様のお陰です。心より感謝しております。

支援者の一人として

松下正弘様　埼玉県

『成寿』第三十七号大圓武志一周忌特集号を感慨深く読み、そして故黒田武志大和尚への感謝の気持ちを再度強く持ちました。これからの博志ご住職の決意と今後の期待とが混ざった記事には釘付けになりました。私もその支援者の一人として加えてください。益々の活躍を期待しております。

懐かしい面影を偲ぶ

柿沼幸子様　栃木県

本日『成寿』冬季号拝受いたしました。有難うございます。

故二世中興大圓武志大和尚の在りし日の懐かしい面影が偲ばれます。

ご立派なご功績を残して逝かれました。武志大和尚のご意志を受け継がれ、善光寺が益々ご興隆されますことを信じ、祈り、拝読させていただきます。

机を並べた思い出

新潟県
雲洞庵　新井勝龍老師

『成寿』第三十七号「大圓武志大和尚一周忌」、誠に有難うございました。早や三回忌とのことでございますが、私も高齢化した故か、四十年程前大学院で机を並べて聴講した頃の事が、思い出されてなりません。心から御冥福をお祈り申し上げております。

写真で追慕の念

静岡県
少林寺住職　井上貫道老師

『成寿』三十七号拝受致しました。故武志老師との本山時代そして参禅会（約一年）の思い出を写真と共に追慕しています。

方丈様のお姿に涙

横浜市
石川多加子様

御無沙汰申し上げておりますところに、おなつかしい『成寿』御本お送りいただき、先ず方丈様のお姿に涙致しました。おしい方を亡くされました。何度申し上げても悲しく、方丈様の法話の一言一言が心に浮かびます。あれから善光寺様へもお伺いする思いにならず、こうしたお心づくしに胸がいっぱいです。

先師の配慮有難く

港区
真野龍海様

『成寿』誌、御先代の周忌特集を御恵送下さいまして有難く、又、御高徳を偲んでおります。

小生、二十年程前、スイス、

ローザンヌ大学だったか訪問しました時、拙著が並んでいるのでびっくりしました。おそらく、先師が寄贈されたのであろうと、有難く思いました。それを想起しつつ、追善の意を捧げます。

充実した内容に敬服

静岡県
正林寺住職　田中良昭老師

『成寿』第三十七巻をお送り下さり誠に有難うございました。

八面六臂の大活躍をされた武志前方丈様の遺徳が偲ばれる充実した内容に加え、北陸の古刹大乗寺と永光寺を訪ねられた美しいカラー写真と解説、東老師との対談集、新住職様の力量も発揮された内容に敬服しました。

博志方丈の真摯なお姿

三重県
光明寺住職　山口碩永老師

『成寿』第三十七巻を拝読、大圓老師のご尽大な活動と、又博志氏の真摯なお姿を想い流涙いたしました。

今更ながら、良き先達と〝同級の縁〟をいただいた事を深く深く感謝いたして居ります。

大いなる目的へ精進

横浜市
妙法寺住職　久住謙是老師

やすらぎ霊園と共に、我が寺の弥生の杜墓苑、共々にお寺主体の運営で相互に交流させて頂いておりますこと、有難く感謝しております。

先代住職の高邁な使命感を、私も学ばせて頂いている一人として大いなる目的に向かい精進させて頂いております。

無常迅速を痛感

福井県
興福寺住職　木崎浩哉老師

昨年の今日、先住武志方丈様の一周忌が行われたのですね…。『成寿』三十七号を拝読しながら、在りし日のご老師をなつかしく追慕し、無常迅速を痛感致しております。

いかに「生きる」のか

三鷹市
早田啓子様

『成寿』第三十七巻拝受致しました。博志様が北陸大乗寺に東先生を訪ねられた記事を拝読しまして、改めて黒田方丈様の「生き方」に想いをいたしております。

現代という時代、地球規模で難問山積しています。今を生きる我々は、いかに生きるべきなのでしょう。方丈様と交わした会話は、今とそして未来の私の生き方に繋がっています。

〝光〟が広がるように

千葉県
藤田正子様

本日『成寿』第三十七巻をいただきました。表紙は我が師、なつかしい伊藤三喜庵先生の御作、そして表紙を開きますと又、先生の描く、美しい佛の絵…。そのとなりに又々なつかしい前和尚のにこやかな御顔を目にして、しばし胸がつまる思いとなりました。

月日のたつのは早いものです。あっという間に二年位の歳月はたってしまいますが、人を想う心、又、なつかしく、そして感謝する気持は、変わりなく一層深いものになる様な気がします。更に、善光寺様の〝光〟が広がります様にお祈り申し上げます。

まずやれることを

天寧寺住職　大野栄人老師　愛知県

偉大な先住様の御意志をついで全てをやられることは大変なことと存じますが、まずやれることをやって下さい。どうか御身御自愛下さいますよう祈念いたしております。

『成寿』読んで安心

東郷　優様　兵庫県

『成寿』三十七号も届きました。先生亡きあと、どうなっているのか、案じて居りました。すみから、すみ迄、一字ももれなく、拝読しました。博志さん、立派に、成長されました。写真のお姿、お言葉、今後の方針等、誠に立派です。お母さんも、何より嬉しく安心ですね。良かった、良かったと、『成寿』を読み、安心しました。

茶道通じ長く交誼

飯塚平八郎様　千葉県

示寂黒田武志大和尚のご在世中を偲び痛惜に堪えません。

大和尚とは日々庵同門の茶道を通じ、駒澤大学ご在学中からの実に長い交誼の間柄でありました。

常に和顔、静かに語り、謙虚にして包容力豊かな大器であり、卓越した魅力は、人望を担うに十分な人物でございました。

編集後記

▼今号は、山内行事を中心に掲載致しました。一年を振り返りますと、多くの方々のご協力によってどの行事も滞りなく執り行うことができ、また、この「成寿」も無事に発刊することができました。御礼申し上げます。

▼四月に山口老師、真野先生、東郷総代と私でタイ・ワットパクナムを訪問し、ご住職さまから身に余るお持て成しを頂きました。さらにカンボジアに渡り、アンコールワット、アンコールトム、タ・プロム参詣いたしました。ちょうど十五年前（一九九七年四月成寿十九号に掲載）師父が留学僧育英会としてカンボジアと日本の仏教の親善友好に尽力しようと厳しい状況を超えて各寺院を訪問しておりました。師父の足跡を辿り、今回その場所を訪ね留学僧育英会の再開に感謝を込め、供養と報告をしてまいりました。アンコールワットの本殿最頂部に駆け登ったのですが、山口老師の体力とそのスピードに驚かされました。

▼初夏には、檀家の皆様方と北陸路の古刹、大乗寺・永光寺に参拝できましたこと本当に有難いことでした。大乗寺では、東老師をはじめ、石黒知客和尚、修行僧のみなさまに温かくお出迎えいただき、手厚い歓待を受け、帰る際には後ろ髪引かれるような思いをいたしました。厚く厚く感謝申し上げます。中にはご家族三世代六名さまで参加していただいた檀家の方や来春より大乗寺に修行に行く予定の僧侶など、いろいろな方々のご参加により、よい旅、よい思い出となりました。

▼境内の中庭にお迎えいたしました「ほほえみ子安観音」さまを朝夕お参りしていますと、本当に素晴らしいご表情にこちらもついうっとり微笑んでしまいます。ぜひご参詣の際にはお参りくださいませ。お地蔵さま、お観音さまがお揃いでお待ちです。

▼檀信徒の方々との交流をと始めた早朝参禅会はおかげさまで、三年目に入ります。また、今年六月からは写経会も始めました。毎回多くの方々にご参加頂いて行っています。参加者の方々から「心の落ち着く時間を月一回持てて有難い」「清々しい気分になります」などのお声を頂戴しております。「参加したいけれど早朝には来られない」というようなご相談もあり、早朝だけでなく、夕方の開催も考えております。その他ご要望がありましたら、お気軽にお声かけください。

▼明年、一月九日（水）は、新年祈祷会です。皆様おそろいでどうぞお参りください。向寒の砌、どうぞお体に充分ご留意いただき、よいお年をお迎えください。

（博志）

成寿　第三十八巻
平成十九年十二月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電話　〇四五（八四五）一三七一
ＦＡＸ〇四五（八四六）二〇〇〇
印刷所　神奈川新聞社出版部

横浜善光寺